

第12回全国水の郷サミット

「地域資源を活かし、知恵と工夫で持続的な活性化を」

報 告 書

平成 19 年 3 月 23 日（金）

国土交通省 土地・水資源局
水資源部 水源地域対策課

はじめに

「水の郷百選」は、水を活かした地域づくりに資するため、地域固有の水をめぐる歴史や生活文化を維持・発展させるとともに、優れた水環境の保全に努め、水を活かした地域づくりに優れた成果をあげている市町村を平成6年及び7年の2ヵ年において国土交通省が認定したものです。

そして、平成6年の「水の郷百選」の認定以来、毎年「全国水の郷サミット」が認定市町村において開催され、水の郷や水文化普及のPR、あるいは水の郷市町村の情報発信の場として活用されてきました。

本年度のサミットの開催は、国土交通省が主催となり、水の郷認定市町村のみならず、広く水を活かした地域づくりを展開している市町村の方々の参加を得て、「地域資源を活かし、知恵と工夫で持続的な活性化を」をテーマに開催することとなりました。

本報告書は、平成19年3月23日に国土交通省の講堂で開催された「第12回全国水の郷サミット」において発表された講演やパネルディスカッション内容の記録及び当日配布された資料を盛り込んで作成しています。

本報告書が、水の郷認定市町村はもとより、水を活かした地域づくりを展開されている市町村等に広く活用していただければ幸いです。

平成19年3月

国土交通省土地・水資源局水資源部水源地域対策課

目 次

1. 第12回全国水の郷サミット開催式次第	
2. 開会挨拶	1
3. 最近の水の郷の状況	3
4. 基調講演	
(1) 静岡県川根本町長 杉山 嘉英	6
(2) 奈良県十津川村長 更谷 慈禧	14
5. 報告	
(1) 河合 菜穂子	21
(2) 小倉 順	28
(3) 本間 真弓	33
6. 所感：堀繁東京大学大学院教授	41
7. パネルディスカッション	50

次 第

平成19年3月23日（金）13:30～17:50

於 合同庁舎第2号館（国土交通省）地下講堂

- 1 主催者挨拶
国土交通省土地・水資源局水資源部長 棚橋 通雄
- 2 「最近の水の郷市町村の動向と水源地域対策」
国土交通省土地・水資源局水資源部水源地域対策課長 渡辺 信一
- 3 基調講演1 「地域の絆 大井川」
静岡県川根本町長 杉山 嘉英 氏
- 4 基調講演2 「森林とのかかわり 心身再生の郷作りを目指して」
奈良県十津川村長 更谷 慈禧 氏
- 5 事例報告1 東京大学大学院農学生命科学研究科 河合 菜穂子 氏
- 6 事例報告2 水郷与田浦地域活性化促進協議会 小倉 順 氏
- 7 事例報告3 鶴岡市産業課 本間 真弓 氏

（休憩）

- 8 「地域活性化に携わっての所感」東京大学大学院教授 堀 繁 氏
- 9 パネルディスカッション
コーディネーター 堀 繁 氏
パネラー 杉山嘉英、更谷慈禧、河合菜穂子、小倉順、本間真弓各氏

開会挨拶

国土交通省 土地・水資源局 水資源部長
棚橋 通雄

ただいまご紹介いただきました国土交通省で水資源部長をしております棚橋と申します。本日、第12回全国水の郷サミットの開催にあたり、大変お忙しい中、関係市町村、あるいは関係都道府県の皆さま方をはじめ、多数の方々に参加していただきました。まずは、御礼を申し上げたいと思っております。

全国水の郷サミットにつきましては、前回から「水の郷」認定市町村をはじめ地域づくりに関係する職員の方々に、国土交通省にお集まりいただいて開催する形になりました。今回のサミットは、「地域づくりを活かし、知恵と工夫で持続的な活性化を」をテーマとしております。全国各地の「水の郷」市町村の現状を踏まえ、水をはじめとする地域の様々な資源を活用し、継続的な地域活性化を図ることにつきまして、参加者の皆さま方とともに認識を共有して参りたい。そういうことからこのテーマを設定しております。

ご案内のように今国会でもテーマになっておりますが、格差の問題、特に都市と地方との格差が言われております。国土交通省としては、全国がバランスよく発展していくことが最大の課題であり、この水の郷サミットのみならず、観光分野、地域づくり分野でも様々な努力を継続しております。また、国土形成計画の全国計画の策定の中でも、そういった課題に取り組んで参りたいと思っております。今日のテーマである「水の郷、水を活かした地域づくり」のみならず、諸制度を活用し、ぜひ地域が生きいきとして生活できる場になるよう、我々としても努めて参りたいと思っております。

私どもが担当している水資源の話につきましても、今まではどちらかと言いますと、人口が増大する中でダムなどを建設し、増大する需要に如何に供給を追いつかせるかという時代でした。ご案内のように人口減少化になりまして、需要と供給ということよりは、現在は水資源を如何に安定的に供給していくかということになっております。特に最近、気象の変動幅が大きくなってきております。また、地球温暖化によって雪の量が少なくなりました。雪は天然のダムの役割を果してございまして、ちょうど雪が解ける頃に代かき、田植えが行われます。雪解け水がなくなると、この時期にダムを使わなければならない。そうすると、夏場の飲み水が不足する時にほとんど空になってしまう。そういうことも起こりますので、これからは気象変動等にも対応し、如何に安定的に水を供給していくのかということが課題となります。また、水の安全性と、それからペットボトルが大変売れていますように、おいしい水という味の問題もあると思います。こういったことが今後の水資源行政の課題であり、我々も課題に対応していくよう努めているところでございます。

本日のプログラムでは、「水の郷」市町村に広く存する水にかかわる事例として、静岡県の川根本町の町長さんからお話をいただきます。また、その源である森林と道を活かした地域づくりについて、奈良県十津川村の村長さんからお話をいただくことにしております。そして地域活性化の取り組み事例として、東大の堀研究室、水の郷市町村である千葉県の香取市、山形県の鶴岡市からご報告をいただきます。さらに、各ご講演、ご報告の後、今回のテーマに沿った形で講演の方々にディスカッションをしていただく場を設けておりますので、皆さまも共にこれからの地域活性化について考えていただければと思っております。

ご参加の皆さま方には、本日のご講演等を、「水の郷」にかかわる市町村の今後の地域づくりにぜひとも活かしていただければ大変幸いに存じております。

最後になりましたが、本サミットの開催に当たり、格別の配慮を賜りました東京大学の堀教授をはじめ、関係者の皆さまに深く感謝の意を表しまして、簡単ではございますが、私からの冒頭の挨拶にさせていただきます。本日はよろしくお願ひ致します。

最近の水の郷市町村の動向と水源地域対策

国土交通省 土地・水資源局 水資源部
水源地域対策課長 渡辺 信一

皆さん、こんにちは。国土交通省土地・水資源局水資源部水源地域対策課の渡辺信一と申します。どうぞよろしく願いいたします。「水の郷」の特徴、最近の動向等についてご説明をさせていただきます（図1）。

「水の郷」の特徴につきましては、“水を巡る地域固有の歴史・文化と優れた水環境の保全に努め”、その結果、“水と人とのつながりを形成し、水を活かした地域づくりに優れた成果を上げている地域”として、107地域の選定を行っております。このことにより、国民に対する水環境の保全について、主に行政のほうから意識啓発のPRをさせていただいているところです。この地域の活動を参考にすることにより、水を守り、水を活かした地域づくりに貢献するというのがもともとのコンセプトです。また、認定地域を選定するにあたり、水環境の維持・整備のために住民による活発な取り組みがあるかどうかを基準にしております。

いま国を挙げて地域の活性化ということが課題となっております。今年2月、「地域活性化政策体系」が閣議で了承され、その中でも、「地域の知恵を引き出し、活かす」ことが第1の視点として挙げられております。このような中で、自然と共生し、持続可能な地域をつくることが自立的発展の課題として進められているわけですが、「水の郷」の今の状況を少しかいつまんでみてみたいと思います。

今日お越しの東大の堀教授にも委員になっていただいておりますが、審査の過程で、水を守り、水を活かした地域づくりで成果を上げているところを、原則市町村単位で選定しております。実際には254の地域から応募があり、平成7年と8年の2回に分けて107の地域が、14名の審査委員会の方々によって選定されております。

「水の郷」の現在の状況については、市町村合併等で115市町村だったものが、現在109市町村になっております。合併等で市町村の名前が変わったものも40ございます。その中でも佐原と小見川はそれぞれの認定市町村でしたが、合併により香取市という一つの認定市町村になりました。他にも砺波市と庄川町も二つの認定市町村が一つの市町村になりました。また、豊科町、穂高町、明科町は一つの認定地域でしたが、安曇野市になっております。今日お越しの川根本町も「かわね郷」として認定されて、その一部が合併しており、佐賀市と富士町のそれぞれの認定市町村が佐賀市になっております。

認定市町村の多くでは、水と緑と文化を育むという考え方について変化は少ないわけですが、他の市町村と合併して広域になったことから、テーマの扱いが少し変わっているという状況でございます。はじめに認定した時は、市町村のまちづくりのテーマと「水の郷」としてのテーマとは同じ市町村が多かったということです（図2）。

市町村合併等による広域化で、今のところ、その独自性が地域に発揮されない状況も一部生まれております。また、高齢化・少子化の中で財政の悪化等々があります。それから、もともと「水の郷」市町村の特徴は、個々の市町村の共通認識のレベルで、水を守り、水を活かした地域づくりという基本的な位置付けをとらざるを得なかった。そういう経過がございまして、新鮮味の低下、それを求める側・見る側の変化、「水の郷」に対する意識変化、その環境変化に対する活動の慢性化、ノウハウの不足などもありまして、認定地域の課題となっております（図

3)。

実際には、交通網の整備による広域化、地域間の連携の交流で、より広い地域の中で独自性を出すことが必要になっております。地域づくり、地域資源という観点から、「水の郷」、もしくは、水を守り、水を活かした地域のノウハウをさらに活用する必要性が出てきているということだと思います。いま認定市町村の中では、地域づくりのコンセプトとして水と緑、文化、さらには環境というものに集約されるようになっております。

ただ、これは基本的なコンセプトですので、このコンセプトを実際に支えていくものとして、住民による活動参加、そして持続的な活動のための経済的循環が求められているのではないのでしょうか。実際には、単に役所だけではなく、市町村を取り巻く多様な主体の活動が基盤になります。そのためには NPO や地元の企業が主体的に活動する機会をつくるということです。具体的な動きとして、私どもが幾つかの河川流域における活動を調査していますが、その中で、例えば東三河の豊川流域では、NPO 法人「穂の国森づくりの会」が「森や水のめぐみ」というテーマで、環境認証材などを使い経済的な循環を作り出そうとしています。

また、中国地方の江の川流域では、NPO の中間支援法人の「ひろしまね」が、流域の食文化や食材を広島のレストランなどに提供することにより、食というものを通じ、安心・安全な地産地消を活かした活動を支援して、実際の経済的循環を創り出す活動が進められています。

このようなことで、水を守り、水を活かした地域づくりを、住民の活動・参加と持続的な活動のための経済的循環を支えとして進めていくことが課題になっているということでございます（図4）。

以上が最近の動向ですが、私どもは、水源地域の保全・活性化に関する仕事をしておりますが、その中で平成 19 年度に取り組むテーマを示しております。ソフト対策として、地域の人おこしとしてのリーダー養成研修、専門家によるアドバイス、下流地域と水源地域との交流事業、さらにはそれぞれの地域に対する支援という形での研究・調査、水源地域活性化対策調査と上下流の流域の一体化調査は、今年度より水の郷市町村も対象として進めて参りたいと考えております。数としてはそれぞれの調査は 2～3 地域ですが、皆さんの活動について支援をしていきたいと考えております。

アドバイザーの派遣とは、それぞれの専門家にその地域に 3～4 回行っていただき、具体的な指導をしていただくものです。今年、流域連携でアドバイスいただいた大分県の松村アドバイザーのお話ですが、地域づくりは“3K”であるということです。それは、「広域・回遊・交流」の 3K です。観光のみならず、回遊して交流する。そういうことを考えていくことが大事ではないか、というお話でした。

「水の郷」のコンセプトである水を守り、水を活かした地域づくり、そして歴史・文化をヒントにした地域づくりについて、我々は皆さま方と共に考え、これからも支援をしてまいりたいと考えております。簡単ではございますが、私の話は以上です。

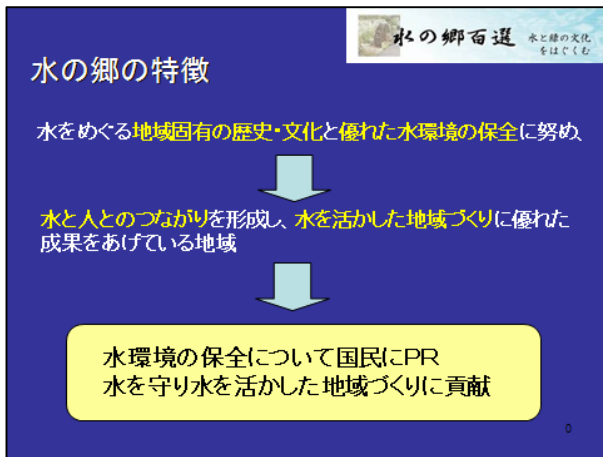


図 1

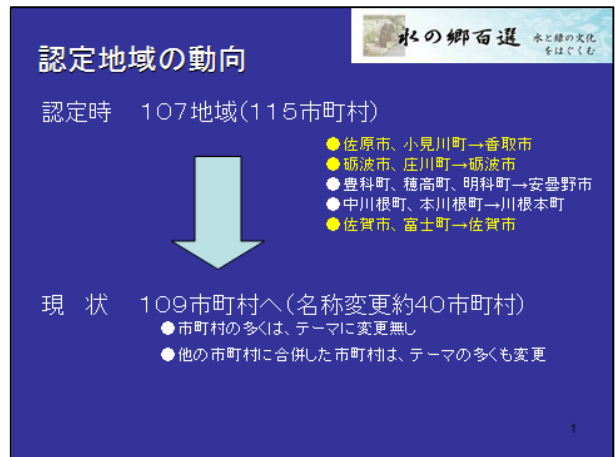


図 2

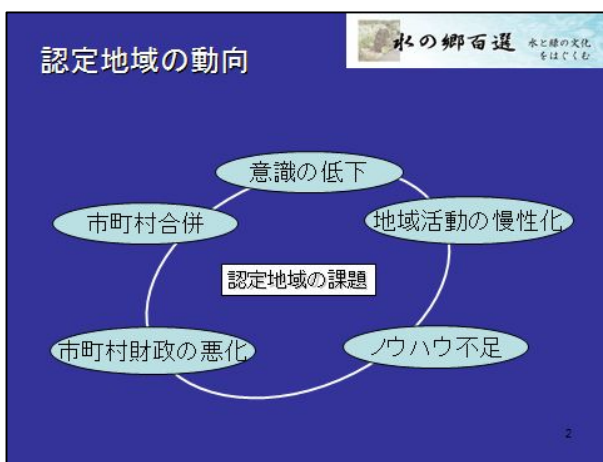


図 3

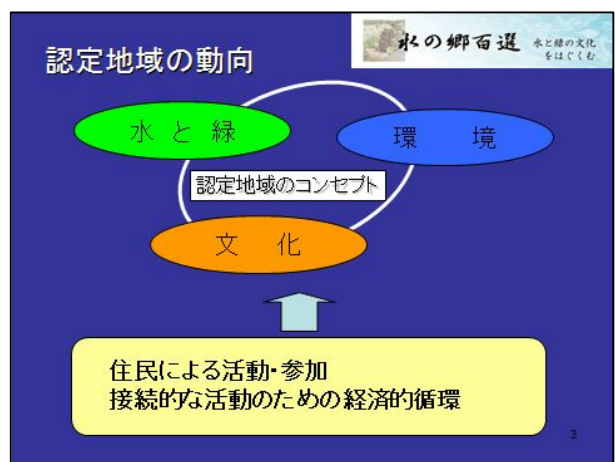


図 4

地域の絆 大井川

静岡県川根本町長

杉山 嘉英

ただいまご紹介いただきました川根本町長の杉山でございます。

本日の水の郷サミットでは、「地域資源を活かし、知恵と工夫で持続的な活性化を」というテーマがあります（図1）。そもそも「水の郷」には「水を守り、水を活かす」というテーマがございます。当町の水、いわゆる大井川に関しては、地域資源を活かすというよりも、まずその地域資源を守らなければならない。大井川を本来の形に戻さなければならない。そういったテーマがございますので、活かすというよりも守るというところに話の重点がいかうかと思っておりますが、そういう地域の事情をお許しいただきたいと思っております。

私が町長をしております川根本町は、平成17年9月に誕生いたしました（図2）。大井川流域の最上流部の本川根町と、その下流の中川根町の二つの町が合併して誕生しております。本来、川根地域にはもう一つ、川根町という町があります。皆さんご承知のとおり、平成の大合併のさまざまな議論の中で、広域を望む方、単独を望む方、あるいは小さくまとまっていこうという方、様々な動き・流れがありました。私も相当なエネルギーを費やしました。同じような条件の町が手をつないでいこう、川根地域もまとまりましようと言いましたが、いろいろありまして、最終的には二つの町による川根本町の誕生をみております。

人口が約9,000人。世帯数が約3,700。本当に小さな町です。あと5～6年すれば、おそらく静岡県で一番小さな町になろうかと思っております。今回の市町村の枠組みの中で先ほどから出ているように地域資源を活かしていかなければ、これから町の自立はないだろうと思っております。人口の増加、あるいは経済の発展で地域の様々な課題を乗り越え、暮らしが守られた時代はご承知のとおり、終わっております。

もう一度ここで地域資源を活かす仕組みを再構築しなければなりません。そのためには、現在言われているように、住民と行政、あるいは団体が協働していかなければならない。その時の市町村、私どもでいえば町の役割としては、住民の傍に役場があって、住民の目線で一緒に考えていく。まず、役場が率先して汗を流し、住民の方々と共に地域づくりをしていく。あるいは、資源を活かす仕組みを創っていかなければならない。そんな思いで、この小さな川根本町が誕生いたしました（図3）。

静岡県で高齢化率一番、39.4%の町です。しかし、それぞれさまざまな知恵を持った高齢者ばかりですので、何も不安には思っておりません。そうした人的資源、そして地域資源を活かしながら、これからまちづくりをしていきたい。小さくても元気で輝く自治体を目指していきたいと思っております。

地域づくり、まちづくり、あるいは暮らしというのは、「自分のことは自分でやる」が基本だと思っております。自助であります。そして道路づくり、教育、防災、福祉といった個人ではできない部分は、公助、公の者がやっていく。その中間の両方が重なり合う部分がこれからますます重要になってくると思います。そうしたまちづくりを住民と共にやっていきたい。そんなことで川根本町の誕生をみました。

川根本町のテーマは「水と森の番人が創る癒しの里」です。豊かな自然、お茶、温泉に彩られた誰もが安心して暮らせるふるさと。これを目指しております。仮に周辺部で一人暮らしに

なっても、みんなで助け合いながら、高齢者の方が一人でも安心して豊かに生きていける、そんな町をつかっていきたい。当然、若い人たちは自分たちの地域に誇りを持ち、「僕もここで生き抜くのだ」という、そういう教育、地域づくりをしていきたいと思っております。

ここには全国でも有名なお茶があります。温泉は各地で有名ですが、すばらしい温泉もごぞいます。そして南アルプスという、これから世界遺産を目指そうかという地域でもあり、南アルプス間ノ岳から駿河湾まで大井川が約 180 キロ下っております。大変短い距離ですが、南アルプスからの豊富な水量で、従前から様々な形で大井川の水が使われてきました。

大井川の水は、高度成長期、あるいはそれ以前から当然、電力発電、利水に使われてきております。現在、本当に短い距離の間にダム、堰堤の数が 32 個、15 か所の発電所があります(図 4)。こうした本格的な貯水ダム、またそれを利用するための小さなダムがありますので、大井川での一番の課題は、その水がダムからダムへ行く間、水路をほとんど本流に流れていない状況にあるということです。もちろんこの発電のおかげで、地域の産業、暮らし、そして下流域、あるいは静岡県といわず関東、中部の電気を高度成長期に賄ってきたことも事実です。

ただ、大井川は本来、昭和 30 年代のダム開発が始まる前は、道路の未整備を補うためのプロペラ船、あるいは上流の南アルプスから駿河湾まで、いわゆる川狩という方法で多くの人たちがかわり、地域の物流の中核となっておりました。

これは私の町の近くの帆かけ舟です(図 5)。こうした形で様々な物資が下流から上がってきました。写真は昭和 30 年代前半のもので、子供たちも夏には大井川で遊びながら、様々な体験をしてきたということです。昔から大井川は、右と左で駿河国と遠州国に分かれておりました。そういう意味では国境でもあり、両国を結ぶ、あるいは隔てるさまざまな働きもしてきております。子供たちはここで遊びながら、やがて対岸に泳いで渡って初めて一人前の青年になる、そういったところでもあります。

子供から大人、物流までさまざまにかかわった大井川でしたが、現時点では上流から導水管で通し、下流の用水に徹底的に使われております。静岡県の中部地域の農業用水、工業用水、水道水といった形で使われまして、ある時期(昭和 36 年から平成元年まで)、大井川の 180 キロのうち 25 キロほどには一滴も水が流れていないという状況も出現しました。しかし、高度成長期の電源確保、農業増産のための農業用水、あるいは人口増加に対応するための水道水の確保、そうしたことから水をより効率的に使わなければならないということで地元の方々もそれを容認し、推進してきたわけです(図 6)。

過去からずっと大井川とのかかわりがあり、時には洪水がありましたが、ダムの建設によって洪水はなくなり、それぞれ災いをやり過ぎながら恵みを受けてまいりました。しかし、ダムの建設によって洪水はなくなったものの、水量や水質が大きく変化してきます。だんだん水量が減って水がなくなってくる。魚もいなくなった。そういうことから多くの方々は川と関係がなくなってきたというか、無関心になってきました。

「川はどうなってもいいや」と、そういう思いも一部には芽生えてきましたし、子供たちも川で遊ばなくなりました。魚がいなければ当然、川に行っても魚釣りもしません。川との関係が大変希薄になってきて、川に関心のあった方々が「これでいいのか」という、素朴な疑問を持ち始める。それが昭和も終わり頃の時代でした。そこで様々な方々によって、「本来の自然環境に戻しましょう」、「貴重な地域資源である大井川を本来の形にしましょう」という運動が始



図 1

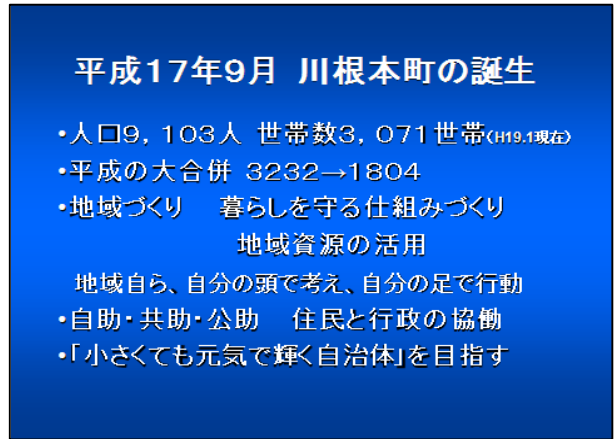


図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

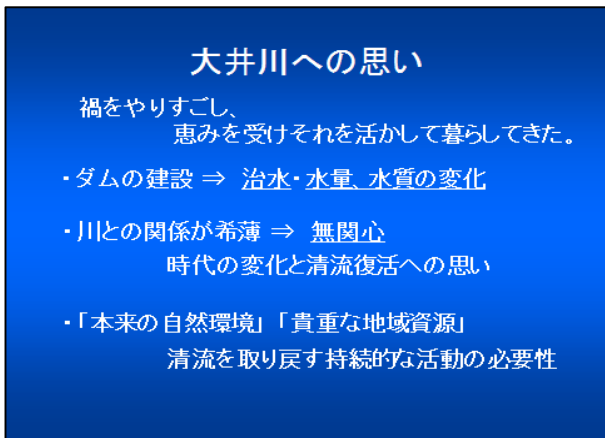


図 7



図 8

まってきたております（図7）。

最初、昭和35年から大井川の水が流れなくなった区間が私の町に出現し、その影響が日に日に増えてまいりました。井戸水の低下、川霧がなくなってしまう、砂塵が舞い上がり、様々な環境問題が出てくる。もちろん、アユの遡上も途切れてしまいました。そこでもう1回本来の形に戻しましょうということで、「水返せ運動」が昭和の終わり頃からスタートします。そして平成元年に3～5トンの水が流れ、基本的には大井川の水が、少量ではありますが上流から下流につながったわけです（図8）。

ここで言うのは、ただ水を返していただきたいということなのです。「自分たちの前の川原に水がないから水を返してください」。ただそれを叫ぶだけの運動です。結果的には水が流れていないことの大きさによって、発電利水者・河川管理者の理解、あるいは県の尽力があって、あるいは県知事の政治的な判断があって水は返ってきましたが、この運動は、先ほど申しました地元の川根だけの運動でした（図9）。

今後、水を守るというのは、流域全体で考えていかなければならない。また近々、水利権の更新もやってくることから、流域全体で大井川の清流を守る研究協議会を平成12年に設立いたしました。前は川根地区だけの運動でしたが、この協議会には、大井川の水を水道水や農業用水で使っている流域の各市、また議会の議長さんにも入っていただきました。私も当時の中川根町長として初めて参加をさせていただきました。前はどちらかというと、「あれは上流だけの運動だ」と言われたものが、今回は「下流の方も上流の方も中流の方も共に流域で水の使い回しを考えましょう。」ということですので、そういう意味では画期的な協議会ではなかったかと思っております。

まず、何をしたか。ほとんど大井川でつながっていたわけですが、それまでは下流の人は下流、上流の人は上流でそれぞれ課題を抱えつつも、それは1本の大井川でつながっている課題であるという認識はなく、連携もなかった。下流の方は、「上流で流木を出すから魚の網が破れてしょうがない。なぜゴミを流すのか」と、ただ不満だけを言っていました。そういうことを解消するために、住民の方々と一緒に上流から海岸に向かって流木拾い、ゴミ拾いをしました。

これはその時の映像です（図10）。上流から行った子供たち、中学生、そして大人も、「上流で木を流せばこういった形で下流に影響があるのだ。ゴミを流せば当然こうなるのだ」と分かってくる。理屈では分かっているけど、実際に自分がゴミを拾って、1日汗をかくことで、上流の環境が下流に直接つながっていることを体感した時でもありました。逆に、今日は、映像は持ってきておりませんが、下流の方々に上流のダムや導水管を見ていただき、「あなた方の水がどのような形で来ているのか。それが上流の環境、あるいは大井川の環境にどれだけ影響しているのか」ということを、身をもって体験していただきました。

平成12年から15年までの4年間、中学生、中学生を教える先生、女性の方、もちろん過去の様々な恵みを体験した高齢者の方、いろいろな層の方に上流あるいは下流に行っていただき、大井川は今こういう状態にあるのだということを知っていただきました。

そうした中で、大井川の最上流部にある田代ダムで水利権の更新がありました（図11）。流域の方々の大井川に対する理解、河川法の改正による河川に対する認識の違い、環境というのが前面に立って、平成17年12月21日に田代ダムの水利権更新で合意を得ることができ、少しではありますが、大井川の本流に流れるべき水が戻ってきました。今回の運動では、ただ「返

せ」ではなく、大井川全川の中でそれぞれの地域の環境を守るためにどれだけの水量が必要なのか、という科学的な根拠で議論がなされたことは、大きな前進であったと思っております。

もちろん、景観、水遊び、河川利用といったところにも水は欲しかったわけですが、何立方の水が流れれば景観としていいのか、というところは議論が分かれますので、今回は魚類の棲息環境の観点から取り組みが行われ、さまざまな検証の結果、1.49あるいは0.43の水が通年返ってくることになりました。普通ならこれは流域を越えて富士川へ流れて行ってしまっていた水です。それが大井川に戻ってきたというのは、大きな成果であったと感じております。清流を守る研究協議会における流域全体それぞれの認識の高まり、そして国と県の理解もあって、初めて水が返ってきた。そのように考えております。

水は返ってきましたが、流域を中心にますます勉強をしていかなければ、大井川の環境改善、あるいは本来の大井川の機能は果たせないと考え、様々な取り組みをしてきました。その中で昨年、「奥大井接岨湖フェスティバル」が開催されました（図 12）。これは国土交通省の事業で、各ダムを回ってくるわけですが、第 20 回が川根本町に来ました。その時に、今までの大井川の清流を守る研究協議会、あるいは流域の様々な水との関係の中から、今回は多くの方々に上流に来てもらう大会にしようと考え準備を進めてまいりました。

通常こうしたフェスティバルは、有名な方の講演とか、タレントのショーとか、そういうことをやって大勢の人を誘客するわけですが、今回はそれぞれ下流の方にも、流木アート、コーラス、物産店、スポーツ、自分たちの得意とするさまざまな分野で取り組んでいただき、フェスティバルを盛り上げてもらおうと考えました。「皆さん、接岨湖（長島ダム）に来て楽しんでください。自分たちの今までのかかわりをここで再現してください。様々な方に体験させてください。」ということでやりまして、当初、1万人の予定が倍の2万1000人の来場者で、主催者としては大成功であったと思っております。

その時に驚いたのは、下流域の方は「初めて来た。自分たちの飲んでいる水はここから来るのか」という方々ばかりでした。水道、農業用水を使っている方から、「ここから水が生まれるのか」「そんなに遠いところではないのですね」という感想がありました。「この水を守るために我々もこれから何とかしなければならぬ」という話もたくさん聞きました。また、途中では、「ここまで来る間、大井川の水は本当に流れていないね」ということも言っていました。「そうですよ。全部導水管を通して下流に行ってしまうのです。皆さんはスプリンクラーで農業用水の水を使っていますが、我々は大井川の水は一滴も使っていません。渴水になれば中学校のプールから、あるいは小さな沢からトラックに積んできた水で畑を潤しているのです。そういう状況も知ってください」。そういうことを多くの方に語りかけました。もちろん、380万人の静岡県ですので一度に理解が進むとは思いませんが、このフェスティバルを通じ、あるいはここに参加してくれた人を通じて、大井川の状況、そして水利用の実態が少しずつ広まってきたという実感を持ちました（図 13）。

このフェスティバルの最大の目玉でもあり、そしてこれから続く事業としてやったのは、子供たちにもう1回大井川にかかわっていただきたい、ということです。今回はこの事業を通じ、流域の一番先にある御前崎の町から我々の川根本町まで、それぞれの地域から手を挙げてくれた小学生の皆さんに半年間、さまざまな形で大井川にかかわってもらって勉強し、交流を持っていただきました。

NHKのテレビでも放送していただきましたが、大井川の森、水を守りたいという視点から、

大井川の清流を守る研究協議会

目的 大井川流域の環境保全と流況改善に必要な調査研究を行うこと。

組織 穂原郡8町(首長・議長)でスタート 設立 平成12年11月



相談役 衆議院議員 原田令詞
元河川局長 尾田栄章

顧問 県議会議員 牧野京夫
大石吾司
伊藤育子



図 9

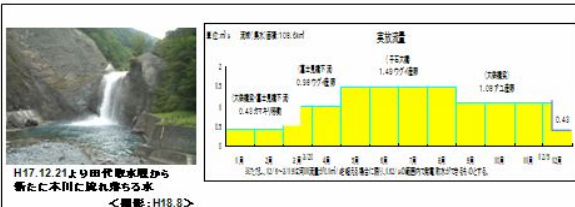


図 10

大井川水利流量調整協議会での合意流量

田代川第二発電所の水利権の期間更新が円滑になされるよう、これまで、関係機関による調整を行ってきましたが、平成17年11月28日、河川維持流量及び許可期間に關して合意されました。

これに基づき、平成17年12月21日から放流が開始されました。



H17.12.21より田代取水堰から新たに本川に流れ落ちる水
<撮影: H18.8>

図 11

奥大井接岨湖フェスティバル



図 12

大井川もりみず守り隊とは

身近にある大きな川、「大井川」。でも最近の子ども達はあまり行ったことがないし、よく知らないという現実があります。
「大井川についてもっと知りたい、もっと体験したい、もっと感じたい。そんな流域周辺の小学生の子とたちが結集して、「大井川もりみず守り隊」が結成されました。



<参加6校> ※順不同
 ■御前崎市立御前崎小学校
 ■菊川市立河城小学校
 ■掛川市立原泉小学校
 ■島田市立島田第一小学校
 ■川根町立川根小学校
 ■川根本町立中川根南部小学校

掛川市川根町立川根南小学校より

図 13

水源涵養林の育林計画



図 14

今後の取り組み

- ・情報共有 無関心を無くす
- ・再度「川の働き」と「暮らし」を結びつける
- ・流域圏で「利水と環境」を考える 折り合いをつける

図 15

平成20年7月水利権更新を向える 奥泉発電所・井川発電所



図 16

海の子は海の子なりに、都市部の子は都市部の子なりに、そして上流の森の町の子は森の町の子なりに様々な体験をし、これから大井川をもっともっとよくしようということを確認していただきました。この事業は単年度だけでは意味がございません。とりあえず2年間、川根本町が事務局となって、子供たちとのかかわり合いの中で大井川とのかかわりを深めてもらう。あるいは自分たちが疑問に思った点を解決するような取り組みをしていただきたい。そういうふうを考え、大井川の森と水を守る事業をこれからも続けていきたいと考えております(図14)。

実際問題、水を守るのは森ですので、A、B、Cとあるところを所有者からお借りし、定期的に下流の方々に来ていただいて間伐体験などをやりながら、これが水を守る一つの働きであることを知っていただきます。別にダム周辺だけが水源ではありませんが、分かりやすくするためにダム周辺の山をお借りして、具体的に山を守る行動をしていきたいと考えております。本来、これは所有者がやるべきことですが、同時に林業の現状、あるいは森林の状況を話ししながら、みんなで水源地を守る活動をこれからも続けていきたいと考えております。

今後の取り組みとしては、先ほどから申し上げているように川に水を流していただき、様々な川との連携を図りながら無関心をなくしていく(図15)。そして課題があれば解決していく。そういうことを続けていきたい。再度、川の働きと暮らしを結び付けるということ、上流、下流の方々に問いかけていきたいと考えております。下流の海岸では砂浜がどんどん後退しております。本来、土砂を流すという川の働きが様々な理由から止まってしまっています。ダムの働きも認めつつ、何とか土砂が流れていくような仕組みをみんなで考えていかなければなりません。それぞれの流域という言葉を使いましたが、単に水が集まる流域だけではなく、水を使っている地域、少し遠くまで含めた流域圏という発想で、今後の利水と環境を考えていきたいと思っております。

水利権更新の時も、ただ「水を返せ」ではなく、発電事業者の社会的使命も認識し、そして下流の方々の農業生産、水道水、工業用水などの必要性も理解しながら、時代の流れと共に何とか折り合いをつけていく。ただ自分を主張するだけではなく、相手の立場を認めながら譲れるところは譲っていく。そして最終的な合意点を結びつける。そういった協議が必要であるとしてずっと流量調整会議をやってきました。今後もそうした姿勢で折り合いをつける、水を使い回す、といったことをやっていかなければなりません。その責任はやはり、一番環境に近いところにある上流の山村にあると私は思っております。我々がしっかり情報を出し、まず自分たちが水の環境を守る。「ですから皆さんにも守っていただきたい」。そういう流れをつくっていききたいと考えております。

今年から静岡県では、森林環境税として下流の方々から一人400円ずつの県民税をいただき、上流の山を守る運動もスタートしました。当然、そうしたものもしっかり受けながら、本来の森、そして水を守る活動を上流側がしっかりやっていく。それをきちんと確認するために、例えば森林認証等も取りながら、下流の方々に「上流はしっかりやっています。だから一緒にやりましょう」という流れをつくっていききたいと考えております。水が戻ってきたら、当町はカヌーにも一生懸命力を入れておりますので、カヌーによって森と水に親しむまちづくりも考えております。本来、大井川が持っていた人と心、モノを結び付ける機能、海と山を結びつける機能、人とひとの心を結びつける機能をもう一度復活させていきたい。もちろん、大井川そのものに木材を流すというようなことはもうできませんが、心と心、あるいは水といったもので人々の気持ちをつなげることができると思っております。

次の更新を迎えております。これも地域エゴではなく、流域全体で大井川の自然環境を守る、全川の自然環境を守るということで、来年の水利権更新に対する働きかけを強めていきたい。ただ主張するだけでなく、それぞれの立場を理解しながら大井川の環境改善を進めていきたいと考えております（図 16）。

そうした取り組みをしながら、大井川の絆の復活を考えていきたいと思っております。我々は、少し大井川を痛めつけてしまったのではないかと。50年かけて痛めつけてきましたので、また50年かけて元の形に戻してやる。そして自分たちの地域資源を守り抜き、活かすという、一つの事例にしていきたいと考えております。大井川を守ることが地域資源を守ることであり、それを次に活かすことに必ずつながってきます。私は、大井川の清流の復活は地域づくりの原点になるだろうと思って、命を懸けて今後ともやっていきたい。ただし、それはエゴであってはいけないと考えております。

大井川に水が流れていない。あるいは通常60トン流れる水が5トン、10トンしか流れていないという状況ですので、私の話もそれに終始いたしました。そういう事情をおくみ取りいただきたいと思っております。戻ってきた水、あるいは現在の水を活かしながらしっかり絆を深めていきたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

森林と道を活かした新たな取り組み

奈良県十津川村長

更谷 慈禧

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました奈良県十津川村村長の更谷でございます。第12回全国水の郷サミットで発表の機会を与えていただきましたことに、心から感謝を申し上げたいと存じます。森林とのかかわり、心身再生の郷づくりを目指して我々が取り組んでおりますことを発表させていただきたいと思っております(図1)。

まず、私どもの村の紹介をさせていただきます(図2)。我が村は世界遺産に選ばれた観光資源を持つ、日本一大きな村でございます。場所は奈良県の最南端に位置し、面積が672平方キロ。奈良県の5分の1の面積を占めております。672平方キロは琵琶湖とほぼ同じで、2平方キロだけまだ当村のほうが大きい。672の中で96%までが山林です。その中に1,000メートルを超える山々が150以上もあります。まさに恵まれた自然環境の中にあると自負をいたしております。その我々の村の中に、「紀伊山地の霊場と参詣道」が、2004年7月、世界遺産の文化遺産として登録になりました。そして、村の中には三つ温泉があるのですが、2004年6月、全国に先駆けまして、「源泉かけ流し」という言葉を発信させていただきました。疑惑問題等々がありました後、「安心して入れる温泉づくり」、「おもてなしの心」も併せてやっているところ です。

我々を取り巻く時代背景でございます。まず、平成13年には3,242あった全国の市町村が、平成18年末には1,804にまでなってしまいます(図3)。まさに市町村存続の危機です。また、交付税なども大変厳しい状況が続いております。

十津川村の現状です(図4)。外材の輸入、生活環境、いろいろな理由から林業が衰退しております。それに代わって道路の整備、土木業の発展があったのですが、今、公共投資の削減などからいよいよ土木業のほうも衰退をしてきました。官から民へという中で公的業の衰退。それに伴う働く場所の減少。まさに人口の減少。過疎・高齢・少子。このままでいくと我々の村の歴史が終わるのではないか。廃村になってしまうのではないか。そのような現状でございます。

廃村なのか発展なのか(図5)。働く場所の確保。過疎からの脱却。そのためには産業へのシフトの最後のチャンスであると位置づけております。外的影響による産業の衰退。それに伴う人口の減少。そして廃村に向かっていく。そうではなしに新たな産業の種蒔きをしていこう。それには官民一体となって徹底的に育成をしていこうではないか。そうすることによって人口が増え、働く場所の産業ができるのではないか。待たなしの産業シフトへのラストチャンスである。このように位置づけております。

「心身再生の郷」を目指す取り組みをしていこう(図6)。その為を受け身型の行政から、能動型の行政に移行していこうではないか。世界から注目される十津川村になろうではないか。そんな話し合いをした中で、改革案として一つは、受け身的な村づくりから能動的・自主的に村づくりを考えていく。もう一つは、大きな会社がわが村に来てくれることはそんなにないわけだから、村の宝、資源の掘り起こしをしていく。そしてその宝を充実させ、十津川村にしかないブランドづくりをしていく。そういうことを目指した改革案を立てたところでございます。

今、村にとって一番重要なことは、官民一体となって一刻も早く産業を育成すること。これ

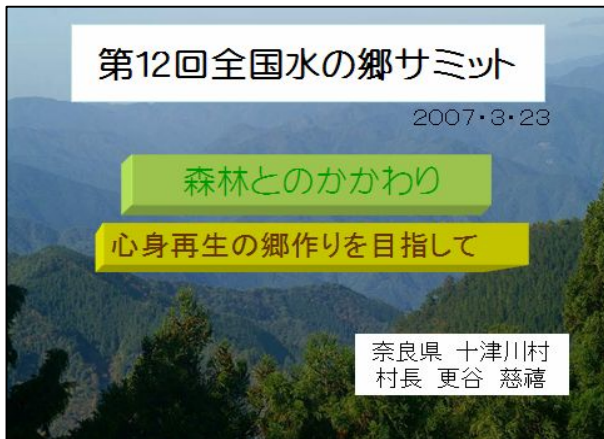


図 1

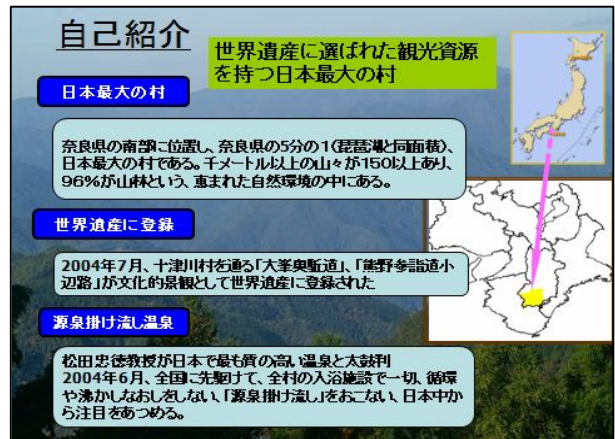


図 2



図 3

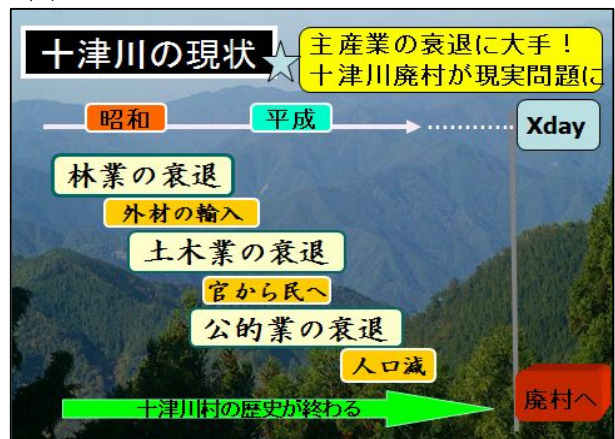


図 4

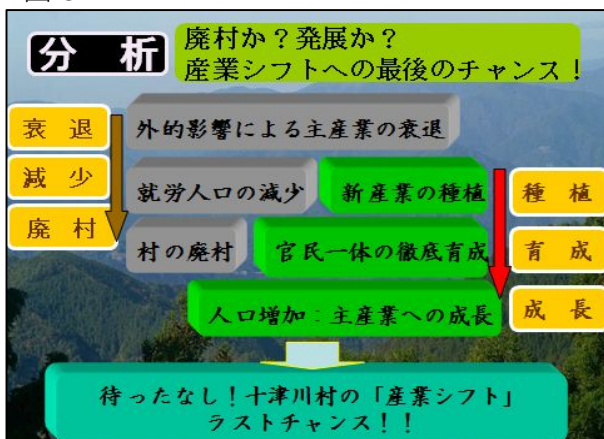


図 5

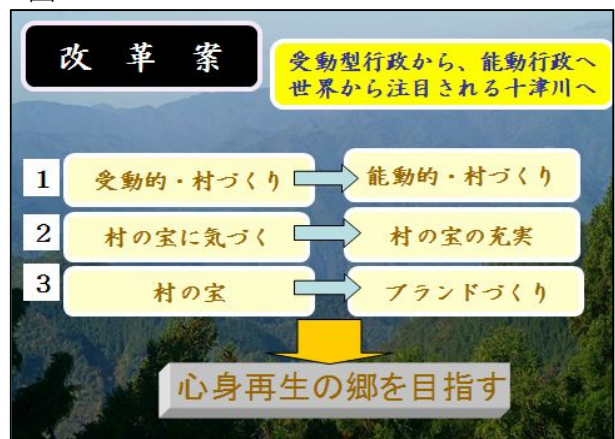


図 6

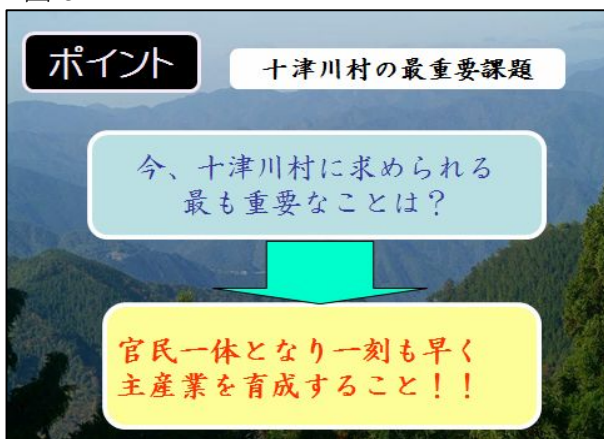


図 7

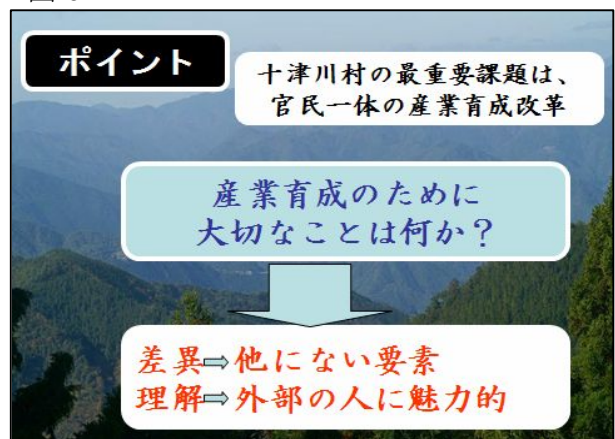


図 8

がポイントになります（図7）。

もう一つは、その産業を育成するために差異と理解に着目をしていこうということです（図8）。差異というのはうちの村にしかないものです。ほかにない要素を掘り起こして行って、村以外の人、都会の人に対し、理解をしてもらう、それが非常に魅力的な要素であることを広くアピールしていこうではないか。そういうこともポイントとしました。

まとめてみますと、一つは希少供給。いわゆる自分の地域にしかないものを掘り起こしていく（図9）。一方、多数需要。都市部のニーズを研究・把握し、都会の人たちは何を感じているのか、何を欲しているのか、そんなことを同時に考え併せながら、その二つを足して商品を作り、加工していく。そしてでき上がった商品を世の中に伝え、広げていこう。こういう地域のブランドづくりを構築していくことにいたしました。

こういう考え方の中で今まで取り組んだ事例を発表させていただきます（図10）。

ブランド化することで戦略を立てました（図11）。世界遺産に登録されたものが全世界で812ありますが、道をテーマにした世界遺産は、スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」と我々の「紀伊山地の霊場と参詣道」の二つしかありません。3年前に登録になった時、私はこの世界遺産をほとんどすべて歩きました。何度も歩きました。歩くことによって多くの気づきがありました。スペインまで行って、あの巡礼の道を歩いてまいりましたが、日本と同じなのです。

ですから、スペインの各市町村やガリシア州の観光局長に、「普遍的な価値というものはこの道にあります。道を通じて人類の大切なものは何か、お互いに手を結びながらやりませんか」と提案し、非常に共鳴・共感をいただきました。その約束もでき上がりました。これを広げるために、メディアと、旅行のプロの知恵と力をお借りしました（図12）。テレビ東京の「ガイアの夜明け」では、当村の再生プロジェクトという形で放映をしていただきました。このツアーについては近畿日本ツーリストさんの協力を得ました。

十津川村、十津川鼓動の会（語り部の団体）、旅館・民宿、観光協会等とも話をしながら官民協働の取り組みを行い、みんなで工夫をいたしました。この世界遺産にはどんな価値があるのか。歩くことからどんなことが得られるのか。そういうことを能動的に体験してもらおう。そういう取り組みでございます。

十津川村の中では、高野山から熊野へ行く熊野参詣道・小辺路、それと吉野から熊野へ行く大峯奥駈道の2本が世界遺産の登録になりました（図13）。

活動の流れです（図14）。平成13年に役場で語り部養成講座をつくりました。翌年、語り部の「鼓動の会」が発足いたします。「鼓動の会」は村の歴史を語る目的で発足したのですが、源泉のかけ流し宣言を行ってお客さんも来てくれる、その次には世界遺産の登録になるということで、一緒に次へのステップを踏める村の宝が表に出てきたわけです。それでは18年9月に「ガイアの夜明け」で放送していただいた、「なびき TOUR」の取り組みを紹介させてもらおうと思います。

活動の方針といたしましては、来訪してくれた人たちに、この地域に古くから伝わっている自然と人間の織りなす普遍的な価値、また、この村の文化、歴史、精神風土として守り伝えている姿を知っていただく。そしてみんなで歩くことによって、新たな価値の創造をしていこうということです（図15）。

「鼓動の会」の目標としては、世界遺産を舞台にして、十津川の歴史、文化、精神風土の生

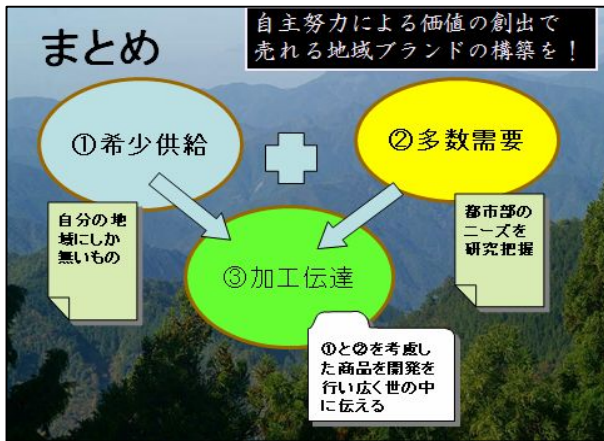


図 9

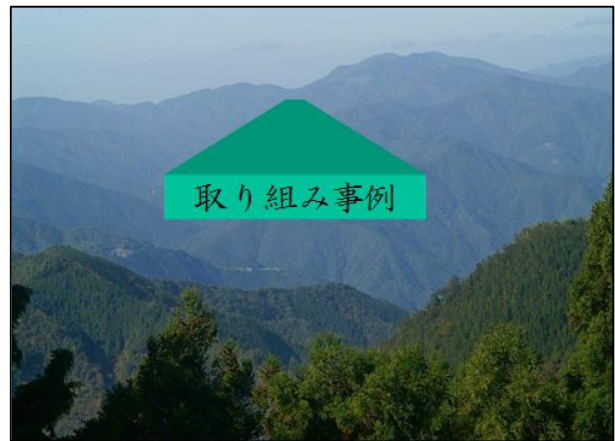


図 10

ブランド戦略 世界遺産の「道」は2つだけ 協力体制を依頼すべく訪問

世界遺産の道は二箇所だけ

世界遺産は全世界で812箇所。但し「道」をテーマにしたものはそのうちわずか2か箇所のみ!

スペイン 「サンティアゴ・コンポステーラ」
日本 「紀伊山地の霊場と参詣道」

スペインを表敬訪問、協力体制依頼

世界に「道」の大切さを訴えられる共同の企画を実施出来ないかと関連市町村を表敬訪問(歩くことから得られる自己成長という十津川村の志目点に共感していただき、各市町村長、ガリシア州の観光局長とも協力体制検討を約束)

メディア、旅行のプロの協力

TV東京「ガイアの夜明け」で放映
近畿日本ツーリストが協力

図 11

～官民協働の取り組み～
十津川村観光課・十津川鼓動の会

世界遺産ウォーク能動体験のすすめ

～歩くことから得られる普遍的な価値～

図 12



図 13

活動の流れ

- 平成13年10月 十津川村の語り部養成講座 開講
- 平成14年 6月 語り部「十津川鼓動の会」発足
- 平成16年 6月 十津川温泉郷が全国に先駆け「源泉かけ流し」を宣言
- 平成16年 7月 「紀伊山地の霊場と参詣道」ユネスコの世界遺産に登録される
- 平成17年10月 第1回「源泉かけ流し温泉サミット」の開催
「世界遺産 語り部とゆく果無ウォーク」を実施
- 平成18年 5月 五條吉野魅惑フェスティバルに参加
「魅惑体験 玉置山・果無ウォーク」を実施
「フチ湯治プラン(温泉+古道ウォーク)」を実施
- 平成18年 9月 「なびきツアー」開催 テレビ東京「ガイアの夜明け」で十津川村の再生プロジェクトが放映
心身再生へ導く「世界遺産ウォーク」の実施

図 14

活動方針

活動方針

世界が認めた宝物、十津川村の世界遺産[大峯奥駈道・熊野参詣道小辺路]を中心に語り部として、来訪者に地域に古くから伝わる、自然と人間が織り成した普遍的な価値をもつ文化・歴史・精神風土など守り伝えるとともに、新たな価値の創造を活動の基本とします。

世界遺産の語り部として

守り伝える
+
新たな価値の創造

大峯奥駈道 熊野参詣道小辺路

図 15

鼓動の会の目標

世界に2つしかない世界遺産の道

大峯奥駈道・熊野参詣道小辺路

能動体験
自分の身体を使って能動的に動く

歴史 文化 精神風土

心身再生とは

- 心・身体の癒やしと蘇り
- 人生の再出発

「歩くことから得られる普遍的な価値」

「心身再生」

地域の資源をいかした創造的な活動を目標とします

図 16

き様を伝えようということです（図 16）。熊野は蟻の熊野詣という形で、多くの人がこの道を通って村にやってきました。それから修験道は、情報も入ったが、自分を見直す、よみがえりの世界でもあった。黄泉の世界に行ってよみがえり、また世の中に出て行く。まさにそういう場所であるから、今風にアレンジをしていこう。今、モノとカネの時代から心の時代に移ってきました。お金やモノよりももっと大切なものがあるのではないか。自分自身が能動的に歩くことで、その普遍的な価値、あるいは人の生き様というものを見いだすためにこのツアーに参加していただきたい。それが心身再生になり、人生の新たな出発になるのではないか。そういう取り組みをしたわけです。

昨年度の取り組みです（図 17）。世界遺産である玉置山霊場のウォーク。果無集落のウォーク。あるいは次にお見せしたいと思いますが、「なびき TOUR」で非日常的な体験をしてもらいました。

昨年8月、9月に官民協働で「なびき TOUR」を行い、その時にPRビデオをつくりました。

「なびき」とは、修験道の「75 摩（なびき）」から来ており、行場を言います。行をする時に次の方向を示してくれる。あるいはいろいろな気付きを与えてくれるものですので、そういう凄い価値のあることを体感してもらおうということです。これはその時のPRビデオでございませぬ。

（ビデオ上映）

「なびき TOUR」の内容を少し紹介させていただきたいと思ひます（図 18）。

2泊3日のツアーを組みました（図 19）。前夜祭をし、その夜の9時に前夜祭の会場を発っていただき、車で登山口まで行き、10時ぐらいから電気も全然ない、真っ暗な闇の世界を体験してもらいます。頭につけた電灯しかありません。五感で感じながら、山小屋に向かって1時間半余り歩いていただきました。

山小屋に着きました。山小屋は水も電気もありません。そういう状況の中で修験者の話を聞き、山の大切さの話も聞きました。自分のことは自分でするということを体感してもらいました。

朝5時ぐらいに全員が起きます。「自分の飲んだ水は次の人のためにお返しをする」という山のおきてがあります。山小屋から1キロぐらい下がったところに水が湧いている小さな水場があります。急な道ですが、そこから水くみをいたしました。この水で食事も作ります。そういう体験をしていただきました。

山小屋は行仙宿と言ひますが、そこから玉置神社に向けて14.4キロの道があります。その道には鎖につかまらぬいと歩けぬ所もあり、気を許すとけがをしたり落ちてしまったりする。そこをみんなで支え合い、励まし合いながら歩いていただきました。ただ歩くだけではなく、この時に自分のキーワードを考えていただきます。自分の弱いつころを何か見つけて、どんな人間になりたいか、どんな力を持ちたいか、それを思いながら歩いていただく。そのキーワードをみんなにつくっていただひたわけです。

急峻な道を通り、10時間ぐらひかかってゴールの玉置神社に到着します。歩きながら自分自身と見つめ合う。あるいは満足感、達成感を味わひながら歩いてきて、普遍的な価値をいただく。その言葉を奉納するという、神事もさせていただきました。

お祈りをした後は旅館へ、そして源泉かけ流しの温泉に入つて疲れた体を癒してもらひ、地



図 17



図 18



図 19



図 20



図 21

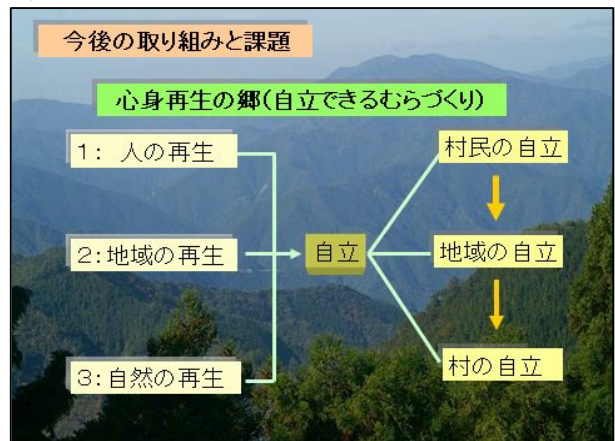


図 22



図 23



図 24

元でとれた野菜やいろいろな食材に満喫していただきました。明くる日は、我々がボランティアで今でも続けている道普請を体験していただきました。世界遺産を守るために自分たちで整備をしていく。あるいは水がない時には、道を歩いてきていろいろなことを感じさせてもらったことで、次の人のために水普請をする。そういう道普請、水普請の体験もしていただきました。

参加者の声をお聞きいただきたいと思います（図 20）。

普通の旅ではありません。自分から能動的に動いて、自分で感じたこと、気付いたことを次へのステップにしていきたいと思います。

いわゆる道の価値を発見する取り組みでございました。歩くことで多くの人たちが気づきとヒントを学びました。歩くことから得られる様々な可能性を追求し、この道を守る人と感動を共有しながら、1300年続いてきた世界遺産を守る責務があります。この世界の宝を守っていく取り組みを、今後も皆さんと一緒にさらに続けていきたいということでございます（図 21）。

こういう切り口で「心身再生の郷」をテーマに掲げ、合併をしなくても自立できる村づくりをするという方向です（図 22）。我々の村は合併をしないとは言っていません。広いがゆえにできない状況なのです。だったらお互いに切磋琢磨し、努力をしてこの村を守っていこうではないか。そこで人の再生、地域の再生、自然の再生になります。

人の再生とは、いま危機である、村がつぶれるといった時に、自分がなすべきことは何なのかを考えてもらおうということです。高齢化率もいま 39%です。高齢者が増えてきましたが、その人たちが中心になっていろいろ表に出てきて、助け合い・支え合いで地域の再生を図っていく。支え合える小集落の地域を目指し、自立に向けて行こうということです。自然の再生ですが、いま林業が不振です。環境、温暖化、いろいろなことがあります。さまざまな知恵を出しながら、あるいは国や県とも話をしながら、本当に大切な田舎の再生をしていく。そうすることが自立につながっていくと考えております。自立できて振興していくと、村民が自立し、地域が自立する。ひいては村が自立していくのではないか。こういうスキームの中で進めております。

今、第4次の十津川村総合計画になります（図 23）。今日もやっておりますが、官民協働で村が生き延びていく術、生き方をいまつくっていかうとしているところです。

「なびき」をすることによって、本当に危機感を持ってくれる若い人たち、あるいはお年寄りの人たちが増えてきました。全体の底上げを図ろうとしたのですが、これは無理でした。課題として、いよいよ、崖っぷちのこの村が生き残るためには、大好きな我々の村を守るのだというやる気のある者が1人、2人、3人と増えていくことなのです。「これは行政がやる仕事ではない。それぞれがどうすればこの村を守っていけるのだろうか」。そんなことを共有しながら今後も進め、田舎の大切さを守っていきたい。そんな思いでいっぱいでございます。

ありがとうございました。終わります（図 24）。

地域資源を活かしたまちづくり

東京大学大学院農学生命科学研究科

河合 菜穂子

こんにちは。東京大学大学院堀研究室博士課程1年の河合と申します。よろしくお願いたします。我々の研究室では、地域資源を活かして地域が潤うようにするにはどうすればよいかということ常々考えています。今日は、香取市与田浦地域を例に、地域活性の具体的な考え方やノウハウについて示していきたいと思っております(図1)。

まず、与田浦地域とはどういうところなのか。与田浦地域には、主に二つの大きな地域資源があります。一つは水生植物園。もう一つが加藤洲水路です。水生植物園は入場料を払って入る市営の植物園です。加藤洲水路は、本当に地域の人々が住んでいるところを舟に乗って巡るという、地域資源を見る形の観光資源です。写真を見てみていかがでしょうか。なかなかそれなりに楽しそうなどころだなあ、きれいなどころだなあ、魅力的だなあというふうに感じるのではないのでしょうか(図2)。

与田浦の観光資源は、ポテンシャルとしては高いと私たちは考えました。しかし残念なことに、現況としては、観光客は減っています。ポテンシャルが高いのに観光客が減っている。それはなぜでしょうか。結論から言いますと、少しだけ観光的に正しくないと考えられるような開発をしてしまっている部分があります。どこが正しくないのか。同じく水資源を利用して観光的に成功している先進事例を見ながら考えていきましょう。その「どこが」というのは本当にささいな部分です。そのささいな部分を写真を見ながら見ていきます(図3)。

まず、加藤洲水路は舟に乗らなければ見に行けません。加藤洲水路の舟には大きな特徴が二つあります。一つは、雨が降っても大丈夫なように屋根が付いているところです。もう一つは、この舟に船頭さんが見えません。船頭さんは座って、モーター付きのエンジンで走行しています。これは些細なことなのですが、実は非常に重要なことなのです。舟というのはこの場合においては重要で、人は居心地のよいところでものを見るといいなあと思いますが、逆に居心地が悪かったり、よく見えなかったりするところでものを見る時には、見るもの自体にも悪い印象を持ってしまいます(図4)。

柳川の川下りの様子です。特徴的と言える部分を柳川比較して見てみましょう。柳川では、船頭さんが櫓を使って、汗を流しながら必死にこいでくれます。もちろん舟には屋根がありません。周りがよく見えます(図5)。

倉敷でも、船頭さんがこいでくれています。やはり屋根がありません(図6)。ここで与田浦のフォローをしますと、与田浦はルートの関係上、利根川に出なければいけません。利根川は非常に大きい川ですので、モーター付きのエンジンで行かなければ時間的にも体力的にも無理という部分があります。そこで加藤洲水路の間だけ手でこぐようになっているのですが、ついついエンジンで走行してしまっているのが現状です。しかし、船頭さんがこいでくれること自体が、実は観光の魅力となっているのです。柳川にしても倉敷にしてもインターネットで検索していただきますと、ブログには、「船頭さんが橋の下をぎりぎり潜ってくれたのが感動的だった」、「船頭さんの話が面白かった」という感想がたくさん出てきて、船頭さんがこいで案内してくれる様子なども観光の一つの大きな魅力となっています。

やはり柳川の写真です(図7)。護岸に女性がメニューを持って待っていて、舟が通ると、「甘



図 1



図 2

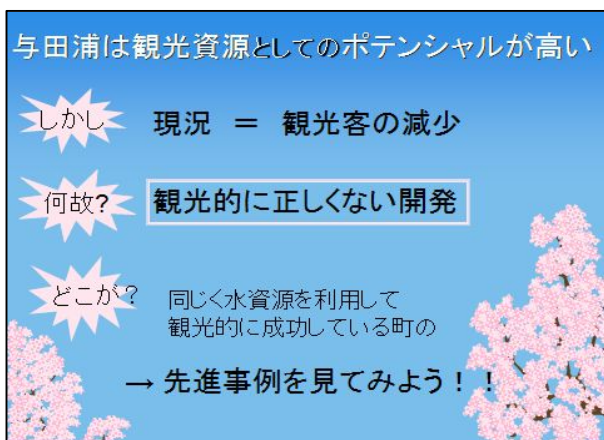


図 3



図 4



図 5



図 6

酒はいかがですか」、「コーヒーはいかがですか」と案内してくれます。もちろん、水路の舟に乗っている方を目当てに飲み物や食べ物を提供しているサービスです。皆さんこれを見ていかが思われるでしょうか。飲食をするということは、観光において最大の楽しみの一つと言えます。与田浦では、かつては団子を売っていたのですが、強引な客引きにつながるとして、残念ながら今は禁止している状況です。でも、舟に乗りながら観光の楽しみの一つである食べることをしないというのは、非常に残念なことではないでしょうか。

柳川ではこたつ舟と言いまして、12月から2月まで舟にこたつを載せ、暖をとりながら川下りができるようになっています。冬の寒さを逆に利用した、非常にユニークな企画で集客をしています(図8)。実際に柳川に問い合わせましたところ、いま柳川にはオフシーズンというのはなく、冬もこたつ舟を目当てに多くのお客さんがいらっしゃっているようです。

水路自体の話をしていきたいと思います。人は舟に乗ってどこを見ていると思われませんか。水面だけを見ていてもつまらないと思います。かといって建物ばかりを見ているわけでもありません。実は、人は水と陸の関係を見えています。つまり、陸と水の境界部分が重要になってきます(図9)。

柳川の写真です(図10)。水路と護岸の境界部分が非常に柔らかい形になっているのが一目で分かると思います。各家々が建てた石積みの塀。それに覆いかぶさるように緑が繁っています。所々に木が張り出して、非常にいい感じに見えていると思います。向かって左側の部分は実は庭になっています。

庭の部分の拡大写真です(図11)。ここは、実は柳川の川下りのハイライト部分で、水路を挟んで向かい側の家の庭になります。つまり、この庭の正面は水路に向かっているわけです。水路を挟んで両側が一体となった造りは非常にユニークで、観光のハイライトになっているゆえんだと思います。しかしそれだけでなく、水路から見て正面にこのような空間があるというのは、現在ではなかなか見られません。このような水路に向かった空間を見えるというのは非常に魅力なのではないでしょうか。

倉敷の写真です(図12)。倉敷の水路に架かっている橋を女性が渡っています。その下を舟で観光客が通っています。舟に乗っている姿。観光をしている姿。このように「見る。見られる関係」ができています。実は、これは非常に重要なことです。と言いますのは、人が楽しんでいる様子を見るというのは観光においては非常に大切に、楽しんでいる様子が見えるということは、自分もそこに行こう、自分もそういう楽しいことができるのだと思わせるからです。

ベルギーのブルージュの写真です(図13)。見る・見られる関係がカフェと舟の関係になっています。ご自分が舟に乗ったつもりで考えてみてください。護岸に非常に楽しそうなカフェがあります。こういうところを見ると、「後であそこに行ってみよう」、「あそこで休んでみよう」と思わないでしょうか。逆に、カフェで休んでいる場合を想像してください。舟に乗って楽しそうにしている人がいたら、やはり自分も乗ってみたいと思うのではないのでしょうか。このようにお互いに楽しそうにしている様子を見て、今度は自分もやってみたいと思わせる。それが観光において非常に重要なことです。

楽しんでいる人を実際に見えるようにする。それがビジネスチャンスをつくることになると言えます。

先ほどと同じブルージュで、城の周りの水路をめぐる舟乗り場の様子です(図14)。舟乗り場の周りにはカフェやお土産屋さんがあり、いろいろ楽しんで舟を待ってられるような工



図 7

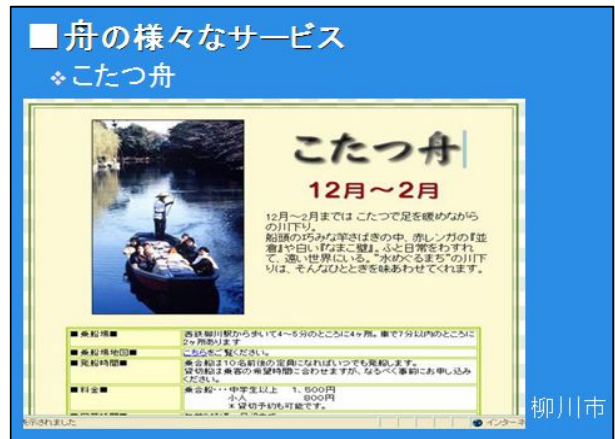


図 8

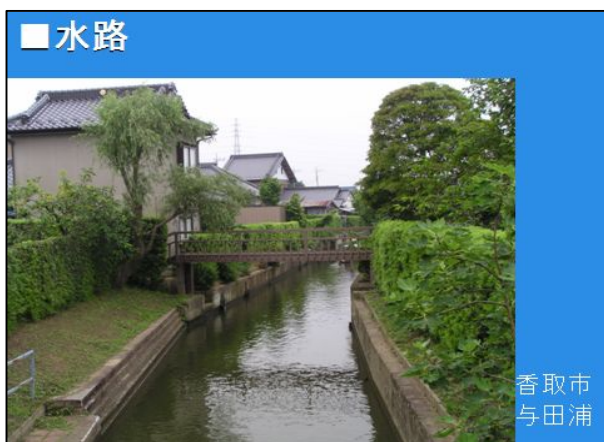


図 9



図 10



図 11



図 12

夫がされています。カフェで休みながらであれば舟を待つのも苦ではありません。逆に、カフェに入ったら、「あ、舟乗り場がある。舟に乗ろうかな」というふうにも思います。このように休んだりお土産を買ったりする場所と舟に乗るという二つの観光の場所が組み合わさっているのですが、二つが組み合わさって2の魅力になるのではなく、さらにそれ以上の3もしくは4の魅力になる。楽しい場所を組み合わせることはより一層魅力を増していくこととなります。

今までご覧いただいた写真で私が言いたかったことをまとめてみます(図15)。成功している町は結局のところ何をしているのか。水路を観光資源にしている例を見てきましたが、それに限らず、地域の観光資源を活かして地域を潤すにはどうしたらいいかというまとめです。共通して言えることは、まず観光客は何をしに来ているのかを考えてみますと、その地域がどういうところなのか、地域をよく見たいと思って来ていることです。ですから、「地域がよく見えるようにする」ということが一つ挙げられます。

2番目が「もてなし」です。「ようこそいらっしゃいました。私たちはあなたを歓迎します」という気持ちを込めて、いろいろ整備をしていくということです。例えば、船頭さんが一生懸命舟をこいでくれる。そういうもてなしの気持ちを感じられるものに、むしろ観光客はお金を払いたいと思います。それを大変だからというので、次から次にお客さんを乗せてエンジンをかけてという感じにされると、何かぼったくられたのではないだろうかという気持ちになってしまいます。そうではなくて、「私たちの地域を見てください」という気持ちを一生懸命表して整備をしたりサービスをしたりすると、人は喜んでその地域でお金を使って楽しみたいと思います。それが3番目に挙げられる「お金を使わせる」ということです。飲み食いする。お土産を買う。地域を知るためのガイドを聞きたい。これは全部押し付けなのではなく、本当は観光客が求めていることなのです。

この3点を大切にしながら地域の開発をしていきますと、おのずと地域が潤っていき、さらに地域が魅力的になる。そして観光客が増えて、また地域が潤う。よい循環ができると考えています。

では、与田浦地域で実際にこのような循環をするためにはどのようなことをしたらいいのかということを考えてみました。

「魅力的な空間づくり」、「街中でくつろぐ(滞留拠点)」と書いてあります。これは、よい循環を生み出すための空間と考えてください。写真は、山形県尾花沢市の銀山温泉の様子です(図16)。足湯ですが、足湯だけではなく、街の中でくつろぐための空間づくりなのです。近くのお店で出しているおまんじゅうやお豆腐を買って食べて、まちを見ながらくつろぐ。それがものすごく観光客に受けて、今はこの足湯には人が絶えません。街中でくつろげる空間をつくるのが、観光の開発において非常に重要なのであると考えています。街中でくつろぐ空間、滞留拠点が今の加藤洲水路には見られませんので、滞留拠点、街中でくつろぐ空間をつくろうというのが私の提案です。

滞留拠点を加藤洲水路につくったイメージ図です(図17)。まず舟に乗って、護岸にあるお土産屋さんやお茶を飲めるようなデッキに寄ります。そして橋に上って加藤洲水路の様子を眺める。もちろんこのデッキは、水路に向かって正面になる空間で、護岸を柔らかくするような形にして、水路の雰囲気をもたらし、そしてまた舟に乗って舟下りを続ける。そのようにしてはどうかと考えました。



図 13



図 14

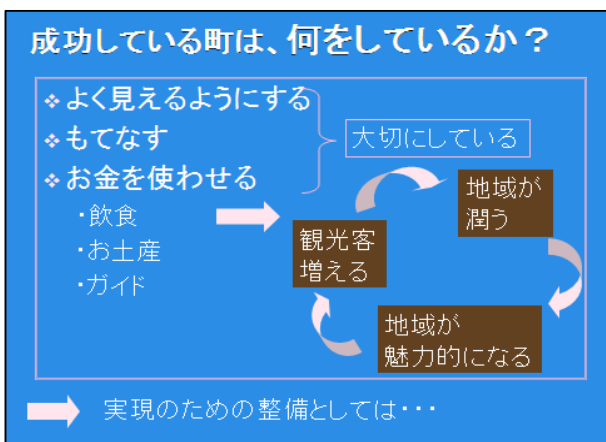


図 15



図 16



図 17

また、水生植物園と絡めた場合の話です。与田浦地域はいま、水生植物園と加藤洲水路がバラバラの状況になっています。しかし、立地的には水生植物園と川下りの舟の発着場所とは隣同士なのです。それなのにバラバラになっている。非常にもったいないと思います。そこで舟の発着場所にも滞留拠点をつくり、水生植物園と組み合わせる。先ほどお話ししたように、楽しい場所を組み合わせることで、1 + 1 は2ではなく、もっとそれ以上に魅力が増していくと思います。一つの地域にある魅力は関連づけて一体となるようにしていったらいいのではないかと考えました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

水郷与田浦地域の活性化

千葉県香取市水郷与田浦地域活性化促進協議会代表

小倉 順

ただいまご紹介いただきました佐原与田浦地域活性化推進協議会の小倉と申します。河合さんからも水郷の件でいろいろお話がありました。若干ダブるところもあります。私は、水郷の佐原において環境事業をやっておりまして、与田浦地域の活性化促進協議会を進めている一人です（図1）。

水郷与田浦地区全体は、皆さまにはあまりなじみの浅い地域だろうと思いますが、千葉県の北東部の香取市で、ちょうど茨城県潮来市の北利根川との間にあり、古くは江戸、徳川幕府による利根川渡船事業に関して新たに新田開発された地域です（図2）。かつて、地元では「えんま（江間）」という言葉を使っていましたが、狭い水路が地域を縦横無尽に走り、「十六島」と呼ばれています。新たに水田開発をされた地域ですが、水路の暮らし、産業等あらゆる分野においても密接な関係が構築されていました。昭和40年の前半、土地改良事業として通路の整備がありました。その当時、生活基盤としては、地域内の移動手段はすべて小舟によらなければなりませんでした。

水郷と呼ばれている地域は、全国各地に多数ございますが、利根川下流の私たちの住む地域は千葉県、茨城県の中心地でもあるところで、本家本元の水の都と言っても過言ではないと思っております。また、この地域には霞ヶ浦に「水の郷」がありますが、鹿島臨海工業地帯で工業用水として共有されているため、霞ヶ浦総合開発事業地域になっております。水の郷サミットに私どもの地域の活動が選定されましたので、その観点から、地域のご紹介、現在抱えている課題についてお話しさせていただきます（図3）。

ご承知のように、私どもの地域は、平成6年に「水の郷佐原」として選定されました。選定ポイントにもなりましたが、佐原は舟運で栄え、江戸末期から大正時代の町並みが多く残されております。その歴史的町並みを活かしたまちづくりに取り組んでおります。歴史的農業施設や土産場の復元。これは市内を流れている小野川に沿って進めているまちづくりです（図4）。先ほど河合さんの写真にも出ましたが、与田浦川を利用した水生植物園があります。娘船頭さんによる加藤洲の十二橋巡りが、最盛期の6月には1か月で約20万程度集客するという時代がありました（図5）。

しかしながらその後、霞ヶ浦総合開発事業により護岸補強工事が行われ、地区の様子が一変しました。多くの事業が20年近く経過し、かつての魅力ある景観には程遠く、自然の復元は難しいと痛感しております。また、観光ニーズの変化などでお客が半減しております。このようなことから、今後、地域として観光客を如何に確保するかというのは、十二橋巡りと水生植物園の管理という住民の生計を維持するためにも課題になっているわけです（図6）。

次に、与田浦地域活性化協議会の紹介をさせていただきます（図7）。水郷与田浦地域は、観光魅力の低下と相俟って、地域を代表する広大な水田を活かした稲作農業では農業所得の減少、生産者の高齢化、そして跡継ぎ不足といったいろいろな課題がありまして、地域全体の先行きが見えない危機的な状態になっております。このような状況から私は、行政頼みではなく、何とか自分たちの手で地域を活性化できないかと考えておりました。そこで私と同じような気持ちを持った地域の人々と、与田浦地域の再開発、活性化を考える会を平成17年に組織しま



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

した。

一方、行政サイドでは、持続性のある水郷与田浦地域活性化対策の必要性を考えておりました。平成 17 年度には国土交通省の地域振興アドバイザー制度を活用し、地域振興戦略づくりのきっかけとなったわけです。

私ども協議会にも声をかけていただきまして、17 年度は 2 回ほど会議を開催いたしました。1 回目は地域の住民同士で問題点と課題の整理を行い、2 回目はアドバイザーの伊藤さんの支援を受け、ワークショップなどにより、その取り組み方法の仕組みの検討を行いました。地区の環境課題の整理としては次の 4 点になりました。「身近コミュニティビジネスとして持続できる農業」、「子供や高齢者が安心して暮らせる町」、「住民の生活を支える交通手段」、「地元の魅力ある町」。そういう課題を解決するためにも提案を行い、2 回目の会議でも提案を受けました。そして課題の解決と地域資源の洗い出しを行い、地域資源の種を育て資源を活かして地域が元気になるようなプロジェクトを考え、事業の優先度を検討したわけです。

この話し合いにおいて提案されたプロジェクトの中で「水の郷百選」のモデル市町村の話があり、「地域住民自らが取り組む川と連携した水郷地域の再生」をテーマに応募させていただきました。そして、水郷地域固有の資源を専門的な見地から再評価し、住民の生活と密着した関係を持つ地域推進プランを検討したのです。小さな取り組みですが、その成功体験をもとに、地域の活性化に向け歯車を回していくことを検討目的とさせていただきました。

具体的な検討目的としては 3 項目あります。1 点目は、加藤洲十二橋、与田浦川、大割水門といった行路の景観づくりと売店などとの連携。2 点目は水生植物園の魅力アップによる入場料の増加。3 点目は、地域で取り組む水の優しい環境対策、暮らしづくりです。それについては外部の先生方にいろいろアドバイスを受けました。そのような私どもの意向に対し、東京大学の堀教授、研究員の河合さんに、水の郷まちづくりモデル地域、あるいは与田浦周辺地域における水源地活性化対策について必要となる考え方をご教示いただきました。一つは既存資源を活かす。二つ目は地域にお金を落とす。そして極力お金をかけないということです。本当に基本スタンスです。十二橋と水生植物園の中心にある観光資源の利用増を図ることを念願に、昨年 12 月 10 日、堀教授に観光の流通促進にあたり、地域づくり、まちづくりといった観点からご講演をいただきました（図 8）。佐原地区の小野川周辺にある歴史的な町並みを活かしたまちづくり、観光地の魅力づくりへのヒント、十二橋巡りの活性化を考えたポイント及び地域を挙げた取り組みについての重要性、大変有意義な話をいただきました。

与田浦地区に人を集める上では改善が必要です。橋という観光資源があるのですが、現在の十二橋は地域とはかかわりが薄い状況にありますので、経済面からも多くのお金を地域に落としてくれるようなポイントづくりをしていきたいと思っております。その点で私の地域で進めていきたいものがあります。米づくりが中心の地域ですので、安全・安心の下に良質でおいしいお米を作りたい。私自身は農家ではありませんが、昨年、農業法人の水郷観光農園という株式会社を設立いたしました。私の本業である環境事業を行う上で竹炭、竹酢を活用してスーパーバイオという有機肥料をつくり、無農薬のコシヒカリを水郷米として生産していきたいと思っております。我々の地域は 1,200 町歩という広大な水田を擁しております。水環境に配慮した米作りを展開し、十二橋、与田浦を訪れたお客さまに喜んで召し上がっていただける米を作りたいと思っております。

今後の取り組みにつきましては、まず今年度の加藤洲水路の取り組みです（図 9）。生活と

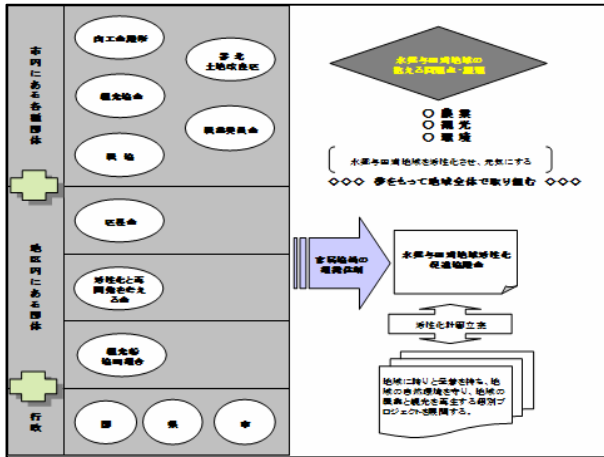


図 7

東京大学院観光教授によるミニ講演会
～観光交流促進のための地域づくり・まちづくり～

観光研究 河合院生による水原地域活性化提案の説明

水原地域の観光資源

- 加藤洲水路(十二橋めぐり)
- 水生植物園

魅力的

現状 → 観光客の減少

観光的に成功している町と ちよつとだけ大切にしていることが違う

何が違うのか? ■福岡県柳川市 ■ヘルギー プリュージュ を見てみよう!!

成功している町は、何をしているのか?

- よく見えるようにする
- もてなす
- お金を使わせる
- 飲食
- 土産
- ガイド

大切にしている

地域が 落ち

観光客 増える

地域が 魅力的になる

図 8

18年度地域活動の概要

○加藤洲区住民による十二橋の命名

①愚索橋 ②虎門橋 ③憩いの橋 ④徳ぶ橋 ⑤金宝樹の橋 ⑥藤見の橋 ⑦見返り橋 ⑧水仙橋 ⑨子育ての橋 ⑩憩い出橋 ⑪十六夜橋 ⑫行々子橋

○十二橋への看板設置活動

○水路周辺への水仙植栽活動

図 9

水路との接点が薄れ、水路に対する地域住民の関心が低下しております。そういう中で、住民が主体となった取り組みを行うため、十二橋巡りを中心とした水郷地域の水を活用する生活・文化の現代的意識を再確認し、具体的には十二橋の固有の橋の命名、内外にアピールするための看板設備を地元の皆さんと実施していただいたところでございます。橋の命名の選定、経過等を通じ、橋にまつわる故事、地域資源の再確認、これからの十二橋巡りのあり方、それを支える地域の協力のあり方について再検討の気運が高まっております。私どもとしても、十二橋の地域の住民の活動を尊重しながら、地域で取り組むことに関し協力していきたいと考えております。

また、19年度より老朽化した橋の架け替えを実施していくと共に、行政側には、十二橋水路の観光客を満足させる魅力ある空間となるような整備とPR活動をお願いしたいと思っております。地域の水、環境をきれいにする活動としては、18年から農林水産省の農地・水・農村環境保全向上対策による取り組みが一部の地域で始まったところでございます。与田浦の環境をよくするためにも多くの関係者の調整が必要と思われませんが、自分たちの地域は自分たちでよくするという、基本的な考え方を進めていきたいと思っております。十二橋巡りの発着場のある与田浦周辺には、水生植物園、市民プール、大根根博物館、閉館している与田浦荘といった設備が集中しております。与田浦荘も活用したプランを含め、「事業化に向けて、支援や施設間の連携方策を」地域と一緒に検討していきたいと思っております。

最後にはなりますが、水の郷をつくる調査として本年度実施いたしました関係者の皆さまに改めてお礼を申し上げますと共に、今後とも水郷与田浦地域協議会の取り組み・活動に関しご協力のほどをお願いしたいと思ひましてご挨拶を申し上げます。ありがとうございました。よろしく申し上げます。

温海温泉のまちづくり

山形県鶴岡市温海庁産業課主任

本間 真弓

皆さま、こんにちは。もっと声を出していきましょう。こんにちは！ 2時間もお話を聴いているのですごく疲れていると思います。疲れている人、いらっしゃいますね。棚橋部長、私に25分ください（図1）。

皆さん、その場にお立ちになってください。隣の人にぶつからないようにちょっと肩を回しましょう。縮めて。前に。後ろに。前に。今度は上にギュッと伸びます。大丈夫ですか。では座ってください。どうもありがとうございます。北は青森、そして南は宮崎のほうからいらっしゃっているようですので、お疲れでしょう。気分をすっきりして私の話を聴いてください。

山形県の鶴岡市温海庁舎から来ました本間真弓と申します。どうぞよろしく願いいたします。実は昨日、役場の6階の講堂で最終のリハーサルをやりました。次長、課長、係長、みんなの前で20分話し終わりましたら、皆さんものすごく顔色が悪くなっていたので「なしたなですか？」「おめの標準語だば、まんず、あんべ（気持ち）悪くなった。明日は庄内弁でおもいきり庄内人のアイデンティティを出してけ」。こう言われてきたので、今日は庄内弁でやらせてもらいます。多少聞きづらいところがあると思いますが、詳しくは資料に標準語で皆さんに分かるように書いてあります。後で読んでください。

それから、私かボランティアでつくってきた「あつみ観光新聞」があります。今まで3年続けまして、「私ならこういう新聞にする」という旅館の女将さんにバトンタッチしましたが、この新聞の特集の対談にも今日お話するヒントがたくさん書いてあります。これも読んでみてください。また、ポストカードが2枚入っています。私が撮った写真をもとにして、役場の給料をもらいながら1日半かけて描いた絵です。記念に持ち帰ってください。

それでは、本題のあつみ温泉のまちづくりについてご報告いたします。

会場の皆さんの中で、山形県に行ったことがあるという方はどれぐらいいますか。こんなにいるのですか。それではちょっと絞って、温海に行ったことがあるという方はどのぐらいいますか。結構いますね。笑った人間の横顔に見えるのが山形県ですが、ちょうど鼻の部分に開湯千年の歴史を刻むあつみ温泉があります（図2）。東京から新潟回りの上越新幹線を利用して3時間30分。飛行機は、札幌、大阪、東京から1時間前後でまっすぐ庄内に来てもらえます。

飛行機から見る庄内平野は、四季を通じてとても美しく、出羽富士と呼ばれる鳥海山、今、世界遺産を目指している出羽三山、朝日連峰という1,000～2,000メートル級の山々に包まれ、豊かな水脈に万物の命が養われています。山ばかりのほうが温海地域です。山ばかりなので水道水であってもおいしく、「私たちの命にとって最高のごちそうだのオ」と毎日喜んで飲んでいます（図3）。

約半世紀前の温海温泉です。日本三大朝市と言わしめた露天商が、ところ狭しと立ち並び、活気に満ち満ちた温泉街でした。しかし、経済成長、自動車社会を迎え、街はその表情を変えていったのです。

ピンクの棒グラフは1年間の入湯客数ですが、平成2年の35万人をピークにガタガタと減っています（図4）。平成元年には19軒あった旅館も7軒がポツンポツンと明かりを消し、今

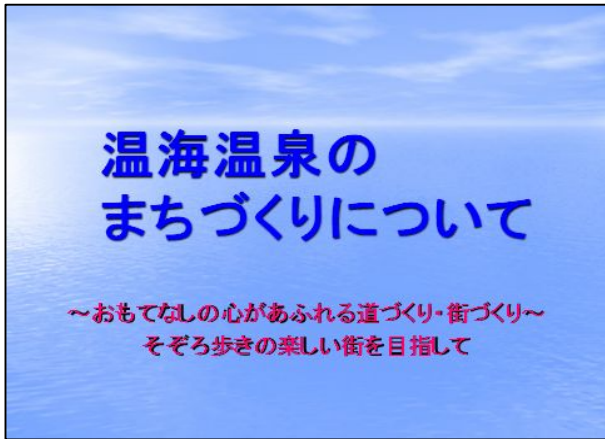


図 1

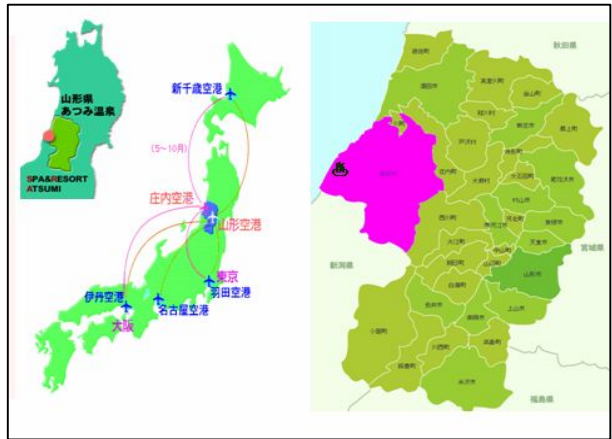


図 2



図 3



図 4

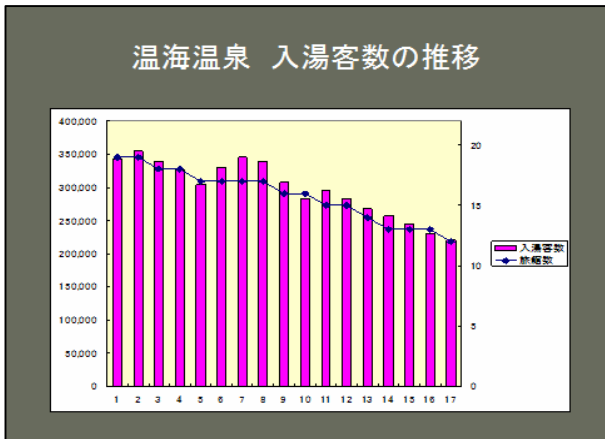


図 5



図 6

湯のまちリフレッシュ事業

- 基本コンセプト**
 - 温泉情緒の演出(楽しい雰囲気空間づくり)
 - ホスピタリティ表現(人優先の道路づくり)
- 事業概要**
 - 歩車道の段差の解消
 - 道路中央部に足湯、縁台風ベンチ、植栽
 - 橋の欄干は透過性に配慮

図 7



図 8

は 12 軒が頑張っています。このような状況になって「俺（おら）がたはどうすればいいんだ。何だかヤバいのう」。やっとそう思った温海温泉住民は、山形県に相談してある先生を紹介してもらいました。

山形県からご紹介いただいたのが、東京大学教授の堀繁先生です（図 6）。今日も前の方に座っておられますが、平成 12 年秋、先生の講演会をやっていただきました。その中で先生から、「皆さん、まちの魅力って一体何ですか。お客さんが観光地に行って何を求めているのか、一つひとつ真剣に考えてみてください。」という提案をいただきました。「温海温泉には何も見るものがないし、俺がたにはお金がないのでレジャーランドは造れない。何もできねえ」。そう口をそろえてきた関係者の目から、ボロボロと大きな鱗が落ち出したのです。一体どういう道が町にあったら、人に優しく、歩いて楽しいのか。どういう食べ物や店があればお客さまから喜ばれるのだろうか。そう考え、東京に行ったり、草津に行ったり、湯布院に行ったり、堀先生と街歩きを何回も何回も繰り返し、スケッチをして、これからお話しする三つの事業に官民一体となって取り組んだのです。

「湯のまちリフレッシュ事業」の基本コンセプトは、「温泉情緒の演出」です。ホスピタリティを表現するために、歩車道の段差解消、道の真ん中には足湯（あんべ湯）、ベンチ、植栽を配置し、橋の欄干は透過性に配慮しました（図 7）。

整備前の葉月橋通りです（図 8）。道路の両側に歩道があり、道の特等席を車が走って行く、日本のどこにでもありそうな道路でした。

どうでしょうか。まず、空間が全然違って見えます（図 9）。真ん中にある足湯と大きな縁台のようなベンチがお客さまに対して、「休んでいってえ！」、「歩いていて疲れないがあ？」と話しかけ、揺れるしだれ桜や櫨の木が「ようこそ。まんず温海さよぐ来てくれたなあ」と誘っています。お客さまがのびのびと休み、堂々と歩ける道に変身しました。これがお客さまを大事に迎え入れる、温泉地のホスピタリティの表現なのです。

橋側から見た同じ通りです（図 10）。軽自動車の脇に、ホテルの冷たい壁を見つめるベンチがありました。しかし、こんなベンチには猫の夫婦しか座りませんでした。

足湯は手段です（図 11）。その目的は、温泉情緒を演出し、人のにぎわい、楽しそうな空間をまちに創り出すことであったのです。足湯で人が長時間休むようになったので、ビジネスチャンスととらえた旅館が、おいしいソフトクリームや冷たいビールを売るようになりました。まちの魅力とは、道、沿道の建物、人のにぎわいの三つがセットで、あとは休むこと、おいしいものがセットになります。

整備前の葉月橋（図 12）。どこにでもありそうな、面白みも何もない橋でした。

眺めのいい下流側を選んで柔らかい雰囲気の木製歩道とベンチを施し、橋は透過性に配慮して造りました（図 13）。こうすることで、今まで見えなかった温海川ときれいな街並みが見えるようになり、お客さまが休んでここに行かれるようになりました。まちが持っている資源というのは、このように人の目に認識されて初めて活かされることができるのです。

山形県がお金を出してやってくれた「やすらぎの川整備事業」です（図 14）。景観資源である地元の山、川を活かす視点をお客さまに与えること。その視点場には居心地のいい空間を整備すること。お客さまに対しておもてなしの心が伝わる休憩スペースにすること。そして見る・見られるの関係で、「何か面白そうだ。なしてあそこに人が集まっているんだろう。あっちさ行ってみっか」。対岸を歩いているからも楽しい空間がよく見えるようにすること。そう

After 葉月橋通り



図 9

Before 葉月橋通り



図 10

After 足湯「あんべ湯」



図 11

Before 葉月橋



図 12

After 葉月橋



図 13

やすらぎの川整備事業(県事業)

温海川における景観整備のコンセプト

- 景観資源である山・川を活かす視点を与えること。
- その視点場を居心地のいい空間に整備すること。
- おもてなしの心が伝わる休憩スペースにすること。
- 楽しい空間が対岸からもよく見えるようにすること。

図 14

After 「ざっこ見の腰掛け」「かじかの下り口」



図 15

After 足湯「もっけ湯」



図 16

いうことをコンセプトにして整備しました（図 15）。

大型旅館の傍にある「ざっこ見の腰掛け」では、カモの親子が水遊びしている様子を、社員の皆さんやお客さんが毎日眺める光景が見られるようになりました（図 15）。それから、「かじかの下り口」では子供たちがアユの放流に参加し、それを対岸から大人がにっこりと笑って眺めています。

足湯の「もつけ湯」（図 16）。地物の温海岳、温海川、温泉という町の三つの資源を一体となって体感できる絶好のポイントを、選びに選んでここに造りました。

お孫さんがアユの放流に参加し、おばあちゃんはそれを眺めながらお茶をいただいています（図 17）。「おばあちゃん、お茶はどげんだ？ うめえか？」と聞いてみたら、「まらず、この川が最高のごちそうだなや」と、日常から解放された笑顔でにっこり私に答えてくれたことが忘れられません。人が川に近づき、味わうことが許され、温海川という最も大きい資源が体感できるようになったのです。

3億円をかけた橋。1億円以上にもなる朝市。公衆浴場。どんなに一から新しいものを整備しても、今まで地元の人が「ここさいてよかった。ここで生きてきてよかった」と味わえる瞬間はありませんでした。ぜいたくにお金をかければいいものができる、単に努力だの根性だのと頑張れば人に愛されるものができるというわけではありません。人を心から満足させ喜ばせるには、一つひとつストーリーに基づいたロジックがあり、綿密なコンセプトメイクを具体化させるノウハウが必要です。私たち温海は、それを実践すればお客さまから喜んでもらえるということにやっと気が付きました。

「温海温泉活性化施設改修事業」（図 18）。民間の保養施設をまち歩きの拠点に整備したのが足湯カフェ「チットモッシュェ（もつしえ湯）」です。お客さんが「何かおもっしょいどこ（面白い所）ある」と言って行けるように大きな興味対象資源とすること。集まった人のにぎわいが通り全体に活気をもたらすこと。民間の刺激となるようなお手本・見本・模範となること。地域を理解するきっかけを与えること。このカフェはそのようなことをコンセプトにして整備しました。

ここは温泉地域と呼ばれる区域で、「あんべ湯」と「もつしえ湯」があります（図 19）。

改修前の施設の写真です（図 20）。道路面の冷たい壁が、お客さまに「来ねえでくれ。俺さ近づくな」と言っているように見えていました。

塀を取り除いたことで人が入りやすくなり、楽しい空間がよく見えるようになりました（図 21）。前面にセットされた花々がお客さまに「よぐ来たのう。ここはおもっしょいどこだよオ」と話しかけ、ブラックボードが「おいしいものがたくさんありますよオ。中に入ってください」と迎えています。

地元で活躍する陶芸家やしな織り作家の秀逸な作品を展示・販売している内部です（図 22）。施設の内部は、懐かしみを感じる古材、杉板、和紙をふんだんに使い、各スペースでいろいろな雰囲気味わえるように工夫しました。

私が今日付けてきたシルクのコサージュは、お母さんたちが一生懸命作っている商品です（図 23）。「どうしてもチットモッシュェにこだわって売りでえ。俺がた、お客さまから喜んでもらえる一流品を作っていくのだあ」と言って一生懸命頑張っています。

このように目には見えない部分で住民が夢を持ち、まちが内面から活性化されています。旅館や商店の皆さんも「チットモッシュェ」を見本にし、店構えを工夫する動きが出てきています。



図 17

温海温泉活性化施設整備事業

■ 廃民間保養所を街歩きの拠点に！

足湯カフェ **ChittoMotché** チットモツシェ

■ 施設コンセプト

- ・大きな興味対象資源
- ・楽しむ利用者のビジュアル化と通りの活性化
- ・民間のお手本・見本・模範
- ・まちの紹介

図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23

事業効果

- 温泉住民の意識が変わった。
- 温泉街に楽しめる空間・施設ができた。
- 新たな客層の日帰り観光客が増加した。
- 温海温泉のイメージアップにつながった。

図 24

車で2～3時間かかる新潟や仙台から、可愛い女性グループやカップルという、今まで来なかったお客さんが遊びに来てくれるようになりました。「チットモッセ」は、足湯に入る、カフェでお茶をする、ギャラリーを楽しむという多目的な上に多面的な魅力の高い施設であるため、街の内側と外側を強力につなぐ拠点として生まれ変わったのです（図24）。

最後にお話しするのが「くらしのみちゾーン整備事業」です（図25）。もてなしの心が溢れる道づくり・まちづくりをみんなで徹底して目指していこうということです。そこで歩車道の段差解消、電線類の地中化を盛り込み、お客さんが歩いて楽しめる道を実現するために、人々のにぎわいを促す、所々に見るべきものがある回遊を促す、「チットモッセ」のように沿道の風景で人々を出迎えるということをコンセプトに進めているところです。

「チットモッセ」の整備後のイメージです（図26）。川のせせらぎを見ながら飲むカフェラテはとてもおいしい味がするので、どうぞ皆さん遊びに来てください。

葉月橋通りと同じ幅員15メートル道路の整備イメージです（図27）。広場的な滞留拠点を数か所設け、人間主役の楽しい空間をどんどんまちに増やしています。

くらしの道の完成に向け、「西の湯布院・東の温海」をキャッチに、地元の旅館組合青年部や商店の皆さんのホスピタリティのハードとソフトを追求する気運が非常に高まっています（図28）。

この明るい笑顔の中にある住民の熱い思いに心をグューッとつかまれ、温泉の現場とデスクを往復する毎日です。私たち市の職員は頭が硬く、自分本位で仕事が甘いために、まちづくりアドバイザーをお願いしている堀先生から、愛情深い厳しいご指導を毎日いただいています。それでも職員の一人ひとりはおもてなしのエキスパートを目指しており、職責である市民のため、そして町のために何とか温海地域の経済の中心である温泉街を再生しよう、活性化しようとチーム一丸となって頑張っています（図29）。

人をもてなすという気持ちをしっかりと考え実践しないと、訪れる人、住む人には伝わりません。この絶好のチャンスを逃さず、街を愛する私たちの思いの花々が咲いたそぞろ歩きの楽しい街の実現を目指し、そしていつかは「ようこそ、ジャパン」と言える美しい日本を代表する一部となるよう、官民一体となって努力してまいります（図30）。

これから温海温泉に視察に行ってみたいと思う方。ありがとうございます。今の話を聴いて興味がわいたという方。ありがとうございます。待っていますので私に電話をください。4月には温泉名物の朝市が始まり、桜の舞い散る最も華やかな温海川河畔をお楽しみいただけます。

最後に、私の大好きな庄内弁でお別れします。まんず、そうせばのう、なあにも気かけねえで、遊びさ来てぐなったらいつでも電話かけらへ。出羽国の名湯、温海温泉でがんす。団子さなっていっぺえ遊びさ来てけらへ。

本日は最後までご清聴いただき、本当にありがとうございました。

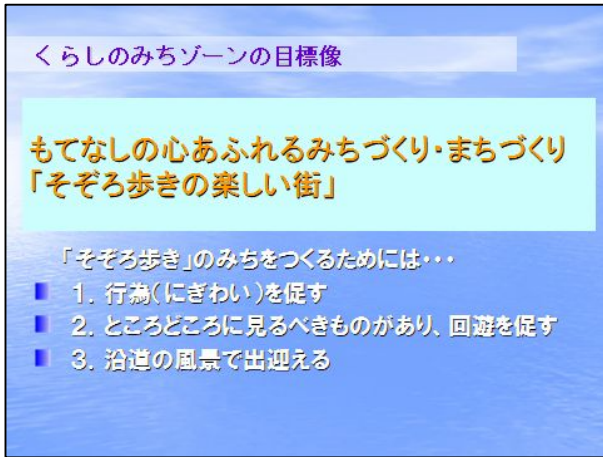


図 25



図 26



図 27



図 28



図 29



図 30

地域活性化に携わっての所感

東京大学大学院アジア生物資源環境研究センター教授

堀 繁

こんにちは。もう少しですのでお付き合いをいただきたいと思います。

今までのお話でお分かりいただけたと思いますし、今日お集まりの皆さんはこの問題は日頃からよく分かっていると思いますが、特に、水の郷を抱えるような中山間地域とか、山の奥とか、そういう地域は人口が減ってきますから、当然、交流人口に期待し、人を集めて金を落としてもらう、これでしか地域が立ち行かないことは明らかなのです。そうしますと、どうやって人を集めてくるのか。ここが大問題です。私たちがどこかに行こうとする時に、どう発想して、どういうところに行くかという、その問題も比較的簡単でして、何か魅力のあるところに行くわけです。それ以外は、もちろん義理があるとか、町長さんが呼んでいるからとか、そういうことで行くわけですが、普通何のしがらみもなければ、「魅力のあるところ」に行きま

す。では地域の魅力とは一体何か。
地域の「魅力」は「強力な資源」、興味対象資源だというふう generally 考えられております。しかし、本当にそうでしょうか。

世界遺産のサンクトペテルブルクです。昔のレニングラード。そのもっと前はもちろんサンクトペテルブルクでした。これは人工物ですが、それが山であったり川であったりしても一緒です。ともかく非常に強力な資源のあることが結局は、地域の魅力であり、それが人を呼ぶ、そういうふうに使われていたのではないのでしょうか。そうではないということが、今日の町長さんと村長さんの基調報告、それから後の報告でだんだん分かってきたのではないかと思います。

さて、二つの場所をお見せしますので、どちらに行ってみたいと思うか、考えてみてください。この図1が1枚目で、世界遺産です。

もう1つは図2で、これは世界遺産ではありません。いかかですか、どちらが魅力的ですか。こちらのほうがいいと思われる方は。そうですね沢山の方が拍手されました。1枚戻して、世界遺産のサンクトペテルブルクがいいと思われる方は。お一人ですね。これだけおられて世界遺産に軍配を上げたのがたった一人。これが事実です。つまり、資源の魅力ではない部分で十分勝負が可能だということ。ここが大事なポイントです。今までは、資源の魅力と考えられていました。資源というのは具体的にいうと、一度は見てみたいと思うということです。だからバブルの頃、盛んに地域がやったのは、みんなが行ってみたいと思うものを造ろうということでした。ミレーの絵を買ってこようとか、ゴッホの絵を買ってこようとか、あるいは凱旋門を造ってしまおうとか、そういうことを盛んにやったわけです。しかし、それで地域はどうなったか。考えればすぐ分かります。「一度は見てみたい」という状況は、一度見れば解消されてしまうじゃないですか。つまり、続かないのです。こちらの方は、世界遺産であるにもかかわらず、これだけの方がいて一人しかいいと言っていない。これが現実です。

では、我々は資源ではない何に引かれているのか。私たちがどこかに行こうと思うのは、一体どういう場合であるのか。ここがポイントです。今日のテーマであります。

この図2は世界遺産でも何でもない普通の城跡です。それだって十分立派な資源です。しかし大事なことは、どんな資源があるかではなく、その資源を光り輝かせてお客さまに提供しているところが大事なのです。まず一つは、先ほど河合が、我々がどこかに行った時にや

っていることは「見る」、「歩く」、「食べる」の三つであって、「見る」が基本だと言いました。この図2は、きちんと見えるようにしています。図1ですと、明らかに車の中から立って見るしかありません。あるいは、駐車場の車の中からしか見ることができない。

図2は座って見られています。重要なのは、実は見られる側の「もの」の価値ではなく、お客さまの側の「体験」なのです。お客さまの側を居心地よく楽しいものにし、飲食と共に提供できれば、それが魅力になるのです。ということはどういうことか。地域でやるべきことは、まず自分たちの地域の資源を自覚し、それを光り輝かせるために、むしろプレゼンテーションするところをよく磨いていくことなのです。非常に居心地よさそうなスペースを作ってあげる。体が弾みそうで、おいしい食事や飲み物が楽しめる状況をつくっていく。これだったらどこだってできるじゃないですか。「うちは世界遺産がない。十津川村は世界遺産を持っているから楽だよね」。そんなことでひがむ必要は全然ありません。それぞれの地域のそれぞれの資源を有効に使うために、自分たちの資源を自覚し、それを磨く工夫をしていく。こういうことならばどこでもできるわけです。

また2枚写真(図3、図4)をお見せします。もう1回確認しましょう。どちらに行ってみたいかです。これは世界遺産です。

図4ガウディです。世界遺産ではありませんが、これも強力です。さて、どちらに行ってみたいでしょうか。図4に行ってみたいと思われる方。では1枚前の世界遺産に行ってみたいと思われる方。お二人ですね。こんなに差がつくのです。何が違ったのか分かりましたね。我々は単純に世界遺産だから魅力だとは思わないということなのです。これも同じでしょう。図3は車道から見るしかありません。対して図4はゆったりしています。このサグラダファミリアが見えるのは車道ではなく歩道です。よく注意して見てください。この道のもともとの歩道は、ここです。ここは、もともとは車道でした。でも、車道で車に追い立てられながら見てもサグラダファミリアは楽しくないし、魅力もありません。そこでバルセロナは何をやったか。車道の中に歩道を造ったわけです。つまり、お客さまを大事にするというホスピタリティ表現です。「どうぞ楽しく歩きながらゆっくりと見てください」というわけです。

もっと重要なのが休憩スペースです。我々がどこかに行つて、いいなあ、楽しいなあと思うのは、極上の休む場所があること。休憩ができないと楽しくありません。立って見なければいけないとしたら、幾らも立ってられないでしょう。「はい、これがサグラダファミリアです。ここに1時間突っ立って見てください」と言われたらどうしますか。できないと思います。でも食事をしながら、友達と話を楽しみながら、1時間見てくださいと言われたらできます。ここが大事なのです。そして言うまでもなく地域に落ちるお金は滞在時間とパラレルな関係にありますから、立って見るしかない、記念写真1枚撮ったらすぐ帰るしかないところと、1時間楽しくいられるところとでは、地域に落ちるお金が全然違うわけです。

また、2枚写真(図5、図6)をお見せします。どちらに行ってみたいか考えてみてください。これが1枚目です。これが2枚目です。図6に行ってみたいと思われる方。では1枚前の図5に行ってみたいと思われる方。お一人。1対多数です。こんなに差がつくのです。図5の川は実は先ほどの真弓さんの説明にありました温海川で、サケが遡ってくる非常にいい天然の川です。

一方、図6は倉敷の川です。行かれたことがあると思いますが、どぶ川です。つまり、資源としての川の魅力は圧倒的に温海川のほうにあります。であるにもかかわらず行ってみたく

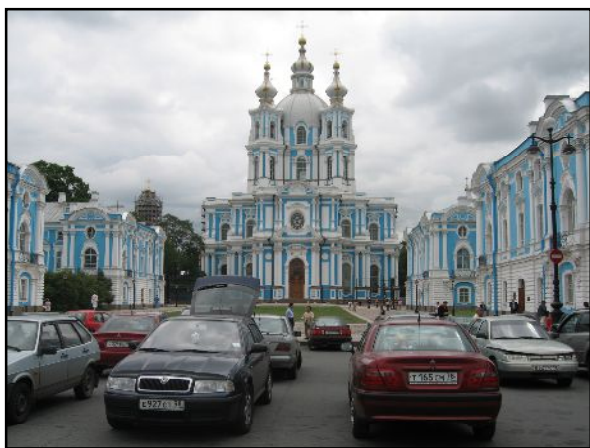


图 1



图 2

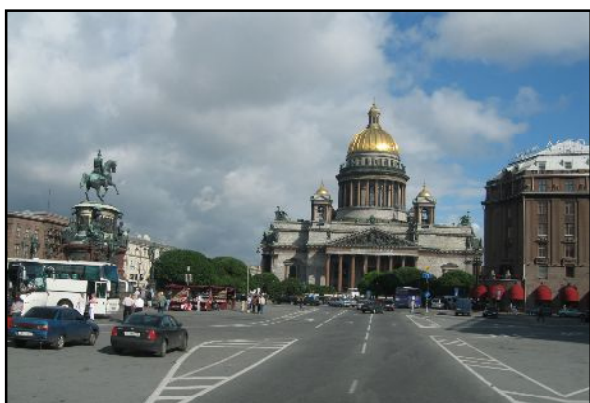


图 3



图 4



图 5



图 6

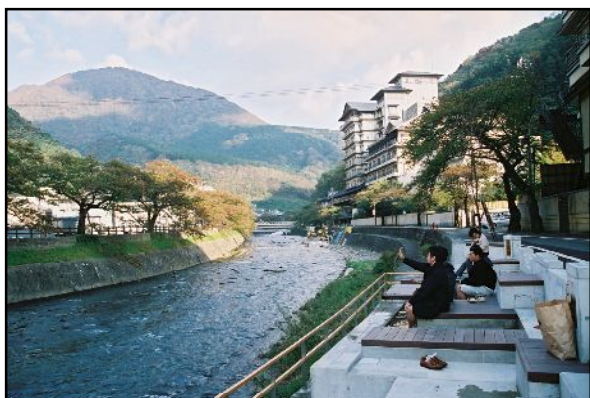


图 7



图 8

いう方が非常に少ない。理由は分かりますね。資源を輝かしていない。磨いていないのです。この整備が川に対して拒絶の形になっている。もともと皆さんの地域には資源が五万とあります。それは輝くのを待っているのです。輝かせていないのは地域の人たちではないでしょうか。輝いていない、誰も行きたくないと思う川で整備をしました（図7）。川に人が近づけるような工夫をしております。「川がある」と「川が実感できる」とは大違いです。単に水資源があるのと、その水資源を「ああ、いい水がある」と実感できるのとは全然違うわけです。その違いは集客力となって現れますので、実感させないといけません。それには人間を川のほうに近づけるための工夫が欠かせないのです。それをきちんとやればずいぶんと評価も違ってきます。「うちにはいい川がないから」と思い込んでいる地域が沢山ありはしないでしょうか。それは川に対して申し訳ない。かわいそうです。川に限りません。森だって、山だって、あるいは建物だって同じです。

地域づくりのコツは、ないものねだりをしないこと。

地域にあるものを活かすこと。

これしかありません。

そうだとしたら、自分の地域にあるものはすべて財産である、資源であるという目で見直すことが一番重要です。今現在魅力がないからといって、「うちには大した資源がない」と思い込むのは、資源に対して失礼です。「地域の資源の魅力がないのは、それを輝かせる努力、工夫をしていないからだ」と一度疑ってみていただきたいのです。

倉敷です。先ほどの図6が、こここのところに柵が出ないように複断面構造になっています。複断面構造になっていると、子供が落ちても別に水面いきなり落ちません。こういう工夫をいろいろやっているところ、地域の資源を磨いて人が資源に近づけて実感できるようにしているところが、この厳しい地域づくり競争の時代で勝ち抜いているのです。こういう工夫のできないところがこれからどんどん落ちていく。そういう厳しい時代です。

図9は温海温泉の昔の姿です。この場所の資源は何か分かりますか。自分達の地域の資源が目利き出来ないと話が始まりません。この場所の何が財産か、資源か、わかりますか。

答えは道です。道という、この資源には、現状魅力ありません。しかし、この道は魅力がないのだと思ってしまったら、そこでもうおしまいです。地域づくりはストップしてしまう。さて皆さん、これを見てどう考えますか。この歩道はたいへん広いでしょう。普通の町の歩道よりも広い。そこで「あ、この広い歩道は資源だ。この広い歩道を活かす工夫がこの温泉地をよみがえらせる」と思えるでしょうか。そう思えば、次のように考えることができます。

図10が図9の整備後です。車道の幅員は変えていません。車道の幅員を変えたらバスが通れなくなってしまいます。広い歩道を財産と思って、その歩道を道の真ん中に持ってきました。つまり、道が財産と思えるかどうか目利き次第です。目利きがきちんとできて、これも財産、これも財産、これも財産と既存資源をきちんと活かすことのできたところが勝つのです。

道のど真ん中に足湯を造ってしまいました。こうすると「広い道」という資源が地域の魅力となってきます。温泉地では最近足湯をよく作ります。「足湯なら、うちにもある」と思われる方も多いでしょう。しかし、実はこれは「足湯を造った」のではなく、「どうぞここでお休みください」という、お客さまをもてなす「休憩スペース」を造ったわけです。

次にやったことを紹介します。図11を見てください。今度は「壁が財産だな」と思ったのです。ではこの壁をどうやって活かすか。皆さんならどうしますか。



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13



図 14



図 15



図 16

答えは図 12 です。先ほども説明がありました、ここは旅館の帳場の壁でした。この壁をぶち抜いてテイクアウトカウンターを造りました。図 11 と図 12 とでは、真ん中は同じ足湯で、壁が違います。どちらが魅力的に思われますか。我々は壁を見ているよりもお店を見たほうが当然、楽しいわけです。だから、壁も資源と思いました。その資源を活かすにはどうしたらいいか。「壁をお店にしよう」。こういうふうな発想したのです。「うちの町には何もない。強力な資源がない」と思ってしまったら、そこで負けです。「何でも資源だ。何でもうまく使ってやろう」。こういうふうなぜひ発想していただきたいと思います。今日来られているところは問題ないと思うのですが、来ないところをどうやって意識改革していくか、この辺は審議官や部長さんにぜひ考えてもらいたい大事なポイントです。

次は、図 13 を考えてみましょう。ここの資源は何でしょうか。そういうふうな発想してみてください。今は、魅力的ではありませんが「自分だったらこういうふうなやる」と考えていただきたいのです。言うまでもなくこれは川が資源です。ただ、川の横に汚いものがあれば、この川も汚く見えます。それから、ゆっくりと眺める場所がありません。これでは宝の持ち腐れ状態です。もちろん町並みも見えていません。そこでどうしたか。

答えは図 14 です。先ほどの河合の報告にもありましたが、川を見る場所を造ったのです。この下に貯湯槽が入っていますので、貯湯槽の天井に凹凸をつけ、コンクリートを少し足しただけです。この分のコンクリート量が増えただけですから、お金はそんなにかかっています。でも、それによって今まで建物の裏手だった川が表になりました。今まで隠れていた町並みがしっかりと見えるようになってきました。つまり町並みという資源、川という資源をこの一つの整備で活かしたわけです。

今度は道側から見てみましょう。図 15 です。町並が見えない。川も見えない。そういう状況でした。ビフォーです。

そしてアフターです（図 16）。共同浴場を移転させ、その跡地に展望、休憩スペースを造ることで川も町並みも活かすことができた。それから温泉地なので、足湯を入れることで温泉の資源も十分活かすということをやったわけです。

図 17 では、観光客が川を見えています。きちんと川を見る場所を造ってやれば、関心はもちろん川に行きます。皆さんのまちの川が仮に来訪者の方に認知されないとしたら、こういう整備が足りないからだと思います。「うちの川は大した川ではない」というのは、きちんとお客さまに川を見てもらうとか、「いい川でしょ」とプレゼンテーションする部分が少し足りない場合が多いのではないのでしょうか。

図 18 は最近の状況です。この花は行政に言われたのでも何でもなく、地元の温泉地の人が自主的に置いているものです。一番大事なことはこれなのです。河合の報告で、船頭さんがいろいろ懇切丁寧に解説してくれたり、汗を垂らして一生懸命こいでくれたりすることが、実は観光客にとって感動をよぶのだという話がありました。何かというと、「地域のもてなし」です。地域の人たちの「お客さまを温かく迎えよう」という心です。ここまで来ると本物です。しかし、地域のもてなしが形になって具体的に来訪者の前に立ち現れるところまでなかなか行かないわけです。そのためには、まずはこういう基本的な整備が必要です。そこがうまく造れて、地域の資源が有効に活用される。そして、お客さんが来て「いいところですねえ」と言ってくれば、もうまちづくりの活動は軌道に乗って、みんなが自信を持って「もっとホスピタリティを出そう」という話になってまいります。



図 17



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23



図 24

図 19 は私が最初に行った時の銀山温泉の状況です。ホスピタリティのホの字もありません。旅館の前に車を置いています。旅館の人が外に出かけるのに便利だからです。しかし、温泉地に来たのに旅館の前に車があって「ああ、いいところだな」と思う人はいないでしょう。つまり地域をくすませていたのは地元の人なのです。そこが大事なことです。地元の人たちがホスピタリティに目覚めて、お客さまをもてなしたい、大事にしたいと思う。たった一人のお客様でも、その人をととても大事に思い、何とか心から迎えたいと思う。そう思った瞬間に実は地域が輝き出すのです。

現在の姿です（図 20）。藤屋のジニーさんという、有名なカリフォルニア出身の女将さんです。車はなく、花で飾られ、実にゆったりと温泉街が歩けるようになりました。ジニーさんの旅館は建て替えたのですが、ほかは全部昔のままです。もともとある資源が輝いているか、輝いていないかというのはちょっとした違いなのです。

今は車をこのようにどけて、車があったところにベンチを沢山置き、テーブルと椅子を置いています（図 21）。「どうぞここでお休みください。ここでゆっくりと町を味わってください」。まるでまち全体が大きな一つの旅館みたいです。この温泉地はここまでホスピタリティが育ちました。だから、地域の財産、資源を曇らせるも輝かせるも結局はその人たち次第なのです。その人たちが自分たちの財産に気がつくかどうか。お客さまをもてなそうとするかどうか。この二つだろうと思います（図 23）。

図 22 は明治時代に建てられた立派な商家です。でもこの建物はどうですか。輝いていないのです。建物が立派でも、はたして私を迎えてくれるかどうか。私たちが一番気にするのは店の前のこの部分なのです。対して、図 24 は最近の普通の建物です。でも、お客さまを迎えようとする気持ちの表れが違います。幾ら立派な建物、古い建物、財産であっても、それが磨かれていなければなかなか地域の魅力につながっていかないわけです。こういうことを丁寧にやっていく作業が、実は地域づくりではないでしょうか。山とか、川とか、森とか、そういう自然も資源ですし、一つひとつの建物も全部資源です。地域にあるものすべて資源です。その資源を魅力的にしているかどうか。ここがポイントです。

図 25 は、先ほど真弓さんの報告にあった「チットモッシュェ」です。地域の資源が魅力的になったかどうかの判断基準はたった一つです。それは何か。若い女の子が来て記念写真を撮るかかどうかです。そうしていたら、それは本物です。こうならなければまだ本物ではない。若い女の子は非常に厳しいです。楽しければ行くし、楽しくなければ絶対に行きません。

図 26 も同様です。このように若い女の子たちが来て記念写真を撮っていたら、相当地域が魅力的になったということだと私はいつも思っています。

図 27 は、先ほどの世界遺産の十津川のすぐ傍ですが、吉野熊野国立公園の熊野市の鬼が城です。私はこの土日に行っていました。昔から非常に有名なところですが、でもこの整備はどうですか。海なのに海が見えない。鬼が城の岩があるのに全然見えない。全部隠してしまっているわけです。しかも、隠しているのが壁です。壁は拒絶の形となります。もともと魅力的な資源がないのではなくて、その資源を人間側が曇らしているのです。こういうところがものすごく多いのではないかと思います。

曇らせておいて「人が来なくなった、人が来なくなった」と言っている。それは自分たちのせいではないかというのが私の話です。それぞれ皆さんの地域には必ず全部資源はあります。それを光り輝かせるか曇らせたままでおくかは、まさに皆さま次第ではないでしょうか。

どうもありがとうございました。



図 25



図 26



図 27

第12回全国水の郷サミット パネルディスカッション

コーディネーター: 堀 繁 東京大学大学院教授
パネリスト: 杉山嘉英 川根本町長
更谷慈禧 十津川村長
河合菜穂子 東京大学大学院
小倉 順 水郷与田浦地域活性化促進協議会
本間真弓 鶴岡市温海庁

堀教授

それでは早速始めたいと思います。終了時間は17時40分を予定しております。それから先ほどお話がありましたように、その後でフロアからのご意見、ご質問を受けたいと思いますので、どうぞご用意をお願いしたいと思います。

先ほど、町長、村長さんの基調講演、それから3人の報告がありました。少し要点を整理したいと思います。最初の杉山町長がほとんど全部まとめてくださいました。皆さんもお聴きになられたのですが、もう1回確認したいと思います。非常に大事なことを最初に言われました。

「資源を活かすことでしか地域は生き残れない」。既にそこにある資源を活かすことでしか地域はもう残れないと思うのです。これから新たにゴッホの絵を買ってくるとか、凱旋門を造りましょうとかいうことはもちろんできないし、またそれをやったとしても、先ほど見ていただいたように、世界遺産があれば必ず人が来るということではないわけです。「意識は地域資源を活かすことである。これに命を懸ける」と言っておられましたが、私も非常に共感を覚えました。「資源を活かすことでしか地域は生き残れない」。もうこの1点に性根を据えることだと思います。

ではどうやって資源を活かすのか。ここが大事なところです。これも実にうまくまとめたいただき、三つのポイントをお話しされておりました。まず、第1段階は地域の人々がその資源に気づくこと。地域の自覚がまず大事であるということでした。なかなか自分たちの資源に自分で気がつかない場合が多いのではないかと。これは更谷村長も言っておられました。やはり世界遺産が一つの契機になったということでした。

第2段階はその資源を磨くこと。杉山町長のところでは、例えば水を戻す、あるいは魚が戻ってくるようにすることによって川というものの資源を磨いていった。更谷さんのところでは、私たちの村にとってこの道は一体どんなものであったのか、「なびきツアー」で道の価値の再発見をされたという話でした。資源を磨くことです。資源を発見して磨くというのは言うは易く本当に難しいことなので、後でもう少しお話を伺わせていただきたいと思います。

第3段階はおそらくこれが究極なのでしょうが、ほかの人の共感を得ること。つまり自己満足で終わっているだけでは、駄目なのだというお話をいただきました。ほかの地域の共感を得るために、杉山さんのところでは上下流合同のいろいろなイベントを行うとか、いろいろなことをやることによって下流の人に気づいてもらおうとしている。あるいは、地域が協力して合同でやることで、「一つの町が言っているのではない。たくさん市の町村が合同で言っているのだ。」という非常に大きな力になる。他者の共感を得て、そこから先に進んで、それを大きな力とする。あるいは、共感を得ることによって来訪者を増やす。更谷さんのところのビデオ

では、よそから来た人が非常に感動的に体験を語っておられました。ああいうことによってほかの地域の人たちの共感を得て、来訪者を増やす。もちろんその先には、お金を落としてもらいたいということが当然あるかと思えます。

いかがでしょう、私のまとめは間違っていますか。資源を活かすことでしか地域は生き残れない。地域の人々がまず資源に気づくことが肝要である。その資源をみんなでいろいろに磨いていく。磨いて地域の財産にしていき、その先に他者の共感を得ることである。よろしいでしょうか。

では具体的に皆さんに伺っていきたいと思います。杉山さんは大井川を中心に水を涵養する森林の話がされていましたが、もう1回改めて考えると、地域の資源とは何なのでしょう。

杉山町長

地域の資源というのは、その地域の生活・文化そのものだと思っています。あえてそこで観光という言葉を使わなくてもいい。例えば、川根本町はお茶の産地です。今まで我々は、お茶をつくり、いいお茶を全国に出すことが、地域の資源、あるいは地域の活性化と思っていました。よく考えれば、その地域に来ていただいて、大井川を眺めながらお茶を飲んでいただく空間を創る。産地でお茶を飲むという空間を持てる。あるいは、さまざまなお茶の話しながらお茶を飲んでいただく。それも資源ではないかと思っています。我々はいいいお茶をある意味では低コストでつくり、それを世に出すことが地域資源の活用と考えていたのが、お茶の楽しみ方、お茶の文化を提供することも資源であるとようやく気づいてきたということです。

堀教授

非常に大事な話です。私が先ほど写真でお見せしたように、世界遺産があるということ、それが地域の大きな魅力になっているということとは別のものだということ、それと共通する話だと思いました。ものがあるだけではなくて、そのものができる背景、そのものの楽しみ方、そのものの見方まで全部セットで提供しないと、本当にその資源が光り輝いてお金に替わっていくことにはならない。お金という話までいかななくてもいいと思いますが、本当の地域の魅力にはなっていないということです。

河合さんは幾つかの地域に入っているいろいろ考えて、その地域にもともとあるものが地域で十分活用されているかという観点から何か感じたことはありますか。

河合

地域のものが活用されているかということですか。

堀教授

河合さんから見て魅力があると思っても十分うまく活用されていないとか、あるいは、もう少しこういうふうにとやったら本当にこの資源が生きてくるのに、そういう活用がなかなかうまく行っていないとか、そういう体験はいかがですか。

河合

私が今回、香取市の与田浦地域の活性化に携わって感じたことは、地域資源とは何かという

問いに対して、まさに私は生活・文化そのものだと思っています。与田浦の、特に加藤洲水路の水路を中心とした地域の生活は、私にとっては非常に魅力的で、この水路から見る周りの地域の生活そのものを、多くの人に見てもらったら非常にいいのではないかと。それが、私が与田浦で見つけた観光の魅力でしたが、地域の人にとっては水路での生活は過去のものであり、不便で、もう時代遅れだという考え方で全く魅力としてはとらえていない。それが今回感じたギャップです。

堀教授

小倉さん、そういうふうに言われていますが、いかがですか。

小倉

河合さんがおっしゃるように、我々もたまに舟に乗るとなかなかいいなという気持ちはします。お客さんから見ても、確かにいいところは一部あります。景観がちょっと悪いかなどというぐらいです。舟に乗ってみましたら、生活は昔に比べて本当に一変していました。当然変わるべくして変わったということだと思います。あの舟乗りは、私は地元ですが、非常にいいと思います。

堀教授

ところで皆さんもお感じになられたかと思いますが、杉山さんと更谷さんのプレゼンテーションが非常にうまかった。これは古いかもしれませんが、首長さんは飾りで、実際には、実務者がやっていて、こういうところに出てくると下が用意した原稿を読んでいるというのが私のイメージでした。

だけどそれはもう許されない時代なのでしょう。お二人は自分で考えて、まさに自分でリードしてプレゼンテーションをやっている。おそらく相当練習もしているのですが、かなり慣れておられるように思いました。時代として、地域の人たちがよく考え、自分たちの地域を磨いてプレゼンテーションやPRをしていかないともう駄目なのだという感じなのでしょう。私はそれが非常に気になったのですが、更谷さん、いかがですか。

更谷村長

私は十津川村にいて、温泉も循環泉にしていました。そうしましたら松田先生が来られて、「これだけ湯量が豊富で非常に泉質のいいものがあるのに、なぜお金をかけて循環なんかするのか」と言われたのですが、「えっ、これは最高の温泉と違うのですか」と言ったぐらいで、毎日入っていると空気と一緒に温泉のありがたさが分からないわけです。

堀教授

自分たちで気づくというよりも、やはりほかの人の指摘で気がついたということですか。

更谷村長

ええ。ですから、「ああ、そうか。入ってみるとそうだね」という感じになりました。先ほどのご質問ですが、山も歩いてみます。歩いたからこそいろいろなことを感じ、このビデオも

伝えなかった。思いのほうに立ってうまく伝えていないのですが、気持ちとしてはよけい村にほれ直したという感じです。

堀教授

結局、自分の体験ということですか。それは別に町長さんや村長さんでなくても、誰でも自分で考え自分で体験すれば、おのずと出てくるのでしょうか。

杉山町長

論点が戻りますが、町長、村長のリーダーシップという点では、やはり同じように自分のまちが好きで、このまちを何とかしたいということで私も更谷さんも首長になったと思います。例えばまちを船に例えると、自分が船長になっても、船の大きさや乗組員の数は、急には変えられません。しかし、方向性は変えられる。あるいはスピードをとりながら嵐を乗り越えたり、嵐の前にその海域を乗り越えたりすることはできる。だから、船長になってかじを切り方向性を定める。そうしないと今の状況は乗り切れないと思っていますので、こういった場にも出てきます。今、役場は人事異動で大変忙しいのですが、トップが自ら行って川根本町のPRをする、あるいは心意気を伝えることで、必ず次につながってきます。そういう思いです。この点は今日出てこられた皆さんみんな同じだと思います。そういう意味では、今リーダーシップが求められていると思います。

堀教授

リーダーシップは当然重要なのですが、行政の一人ひとりがそういう気持ちで、地域を代表してPRする。もっと言うと、行政だけではなく、地域の一人ひとりが自分も地域の一員であることをもう一度自覚し直す。それは先ほどの資源に気付くということと同じだという気がします。

更谷村長

そう思いますね。

堀教授

よく地域の最後の資源は人だと言います。まさにそれがぎりぎり試されている時代なのでしょうね。

更谷村長

私も絶対そうだと思います。先ほど人の再生ということでもうまく話せませんでした。要はうちの村ももう崖っぷちにいます。そうした時に、今までの行政は、19年度の予算を作り、それを消化するのが仕事ではなかったか。しかし、今はもう崖っぷちにある。どうすればこの村が生き延びていくのか。そういう観点から今の組織も白紙に戻して、住民と対話をする。それはどこの課で誰がするのか。そういうところまで落とし込んでいく。危機感を持った中で意識改革を行い、当然村のためにやるのだという、横のつながりが必要ではないか。そんなことを思っていますが、それが難しいわけです。

堀教授

難しいでしょうね。私がなぜこんなことを聞いているかお分かりだと思いますが、確認しますと、地域の資源を発見して磨くのは人ですよ。そうすると、人というのはどういうふうにして育つのか。あるいはどうやって見つけてくるのか。そういうことでお聞きしたわけです。そういう意味では、人材としては真弓さんは優秀だと私も思いますが、もともと地域の資源としてあるのに気がつかなかった、それが気づくようになったというお話がありました。改めて地域の資源をどういうふうにかえたらいいのか。どういうふうに見ていったらいいのか。普通にあるものでも見えていないわけでしょう。それが見えるようになる、あるいは地域の人たちに気付かせるにはどうしたらいいのでしょうか。

本間

杉山町長のお話を聞いていて、やはり杉山町長は自分のまちを非常に愛しているなあと思いました。私の話にもありましたが、おばあちゃんが改めて自分の川を「和菓子よりも最高のごちそうだ」と言ったわけです。東北の田舎で、時に住んでいるのが苦しくなるような感じがあるのですが、そういう風に言われた時に、もしかしてとてもいいところに住んでいるのかもしれないと私も感動したのです。ですから、資源に気づいて、ここにいてよかった、ここに生きていてよかったと思える瞬間ができれば、自分の地域を愛し資源に気付けるのではないかと思います。

堀教授

なるほど。杉山さんの話で、第1段階は地域の資源を自覚することとありました。しかし、自覚するきっかけを誰かが作るなりしないと、気が付けと言うだけではなかなか気がつかない。

本間

そうです。だから、先生にご指導をいただいて、私たちは足湯を道路の真ん中に造ったり、川の傍に腰かけを造ったりした時に、町民の人方が物凄く驚いたのです。やはり実体験としてそれを見ることで、「あれ、全然違うぞ。何かあるのかな」と思う。そういうことが非常に大事だと思います。

堀教授

温海の真弓さんには、私がお願いして来てもらいました。それは幾つか理由があります。一つは、できれば私と関係のないところを呼びたかったのですが、あまり水の郷の情報が入ってきていないのです。それで皆さんにお願いしたいのは、今日は杉山さんと更谷さんから非常にいい報告がありました。おそらく皆さんのところにも絶対面白い話がたくさんあると思います。情報発信はやっているのでしょうか。これは第3段階の「他者の共感を得る」という作業に絶対不可欠なことです。自分達の中だけでやっても駄目です。我々とすれば、聞こえてこないのはないも同然なのです。私の情報収集の怠慢もあるのかもしれませんが、なかなか話がうまく聞こえてこないところがあります。その辺で何か工夫されている点はありますか。杉山さん、更谷さん、いかがですか。

更谷村長

情報を伝えなければいけないことの大切さは本当に感じています。例えば、世界遺産を守る、伝統であった道普請をする、支え合いをする、そういうことは我々の生きざまとして守っているのだということをこういうイベントを通じて知っていただく。この道の大切さをみんなで守ろうではないか、共鳴・共感してくれよということを、イベントをすることで口伝えに伝えていくということです。あとはメディアとか、ブログで流すとか、いろいろやっております。しかし、悪いことはすぐ伝わるのですが、いいことはなかなか伝わらない。そういう状況ですので、いいことがあれば教えていただきたいと思います。

杉山町長

従来のやり方と同じように、やはりイベントで地域資源を発信するということです。小さな自治体には結構負担ですが、例えば全国のお茶祭りや接叡湖フェスティバルをやる。もう一つは、地域の方も、あるいはその周辺の方もみんなが夢中になれることが大事だと思っております。ここに大先輩がいますが、我々は南アルプスを世界遺産にしようと考え、いま運動を始めたばかりです。富士山もやっておりますが、富士山の後は南アルプスということ。難しい道のりであることは分かっておりますが、それをやることによって地域の方が「世界遺産級の文化があるのだ、自然があるのだ」と気づけば、連携や様々な取り組みが繋がると思います。そういう意味では、みんながハッと思うようなテーマを常に与えていく。それをイベントやインターネット、あるいはマスコミを通じて出していく。これが大事です。今、我々は南アルプスに食いついたところ。です。

堀教授

なるほど。情報発信も魅力が命だから、常に考えてハッと成るテーマを探し続けないといけない。お話を伺っていると、やはり不断の努力が必要だということですね。

杉山町長、更谷村長の話は非常に貴重なのですが、私は初めて何う話でした。おそらく今は、都市よりも水資源を抱えている山の中のほうが事態は逼迫しているだけに、必死で努力されているところが沢山あると思います。審議官、ぜひその情報収集をしていただき、ほかの人たちにも情報提供をしていただくと同時に、元気づけるために、すぐ表彰と思ってしまうのですが、何かまた工夫を凝らしてみただけでないでしょうか。

というのは、杉山さんのところは人口が9,000人です。それもどんどん減るだろう。存亡の危機だと思います。そういうところで必死に頑張っている市町村をどうやって応援するのか。最初に政策のご紹介がありましたが、やはり知ってあげて、共感してあげて、肩をたたいて元気付ける。これがまず必要ではないか。こういうのはどうもお金の問題ではないと思います。

更谷村長

「なびきツアー」で道普請をさせてもらったのですが、この時、近畿地方整備局奈良国道工事事務所の所長のところに行きました。「私たちは、道路はやはり生命線だ。いのちの道である。我々はいま古い道を整備している。しかし、この道は情報も物資もたくさん送ってくれた。今、整備してくれている高規格道路の168号線は我々の命の道である。だから所長、一緒に来て道普請をしてくれ」。そう言いましたら来てくれまして、お金もくれました。また、ここで

も発表してくれとまで言うてくれました。その所長は、「奥駈け道を使って職員の研修をするからぜひ行きたい」と言うので、「ぜひ来てください。一緒にやりましょう」と言ったのですが、要は国土交通省というのは道を造るだけではなく、道が本当に地域の命であるということを知ってくれた。それが本当にうれしかったです。道普請の予算は130万かかりました。それを全部出してくれました。出すには苦勞をしたそうでございます。しかし、「大切さを知ってください」と言うて出していただいた。ここにありますが、私どもは「吉野地域道路行政広域業務」という報告書をまとめて提出いたしました。これほどうれしいことはありません。こんな関係で国土交通省さんと話ができるというのは、本当に魂の入った取り組みであったと感謝申し上げます。

堀教授

よその人が自分のところを親身になって考えて協力してくれるだけで、やはり頑張れますよね。頷いている真弓さん、何かございますか。

本間

私たちは堀先生から、まず「仕事を正しく評価し、ほめてくれる」という本当においしいアメと、「仕事のやり方、考え方はこうですよ」という長くて痛いムチをいただきました。先生は、温海をこんなにも愛情深く、考えてくれている。丁寧に今までは「どこに何を造る？」と言って誰もまち歩きもしなかったのに、よそから来た先生がまち歩きを行い、ものすごく真剣にスタディをした。そういうことを私も住民の口から聞いて知ったのですが、やはり良い専門家の意見は非常にきっかけになると思います。

堀教授

バブルの頃は、自称専門家が来て、「1,000万円出せば、あなたのところの活性化の計画を立ててやるよ」と言うて分厚い報告書だけを1冊ポンと残し、1,000万円もらっていく。そういう意味では地域がずいぶん痛めつけられたのではないのでしょうか。皆さんどこの地域も経験があると思います。だから、本当のプロに会っていないために拒否反応があるのですが、やはりプロはプロで厳然と存在します。地域をよくするのは、よその力であれ、内部の力であれ、結局は人です。そのところに改めて思いを馳せていただければいいと思います。

小倉さん、河合さんが地域に入り込んでいろいろとアイデアを出したりして、そういう意味では人の力を入れたわけですが、いかがでしたか。

小倉

地元において足元に気付かないのが住民だろうと思います。河合さんや堀教授の講演をお聴きして、確かにアイデアと言いますか、新しい発想の大切さを痛感しました。ですから、自分たちもあれから1年、お金をかけないような工夫はないかと考えているのですが、それには我々一人ではなく、住民全体にそういう意識を持ってもらって改善方向に持っていかないとなかなか難しいと痛感しております。とにかく住民と一体となってやるという気持ちで、いろいろな知恵を出し合い、今後また河合さんや堀先生のいろいろなお知恵をお借りしながらやりたいと思います。

とにかく我々の地域は、水と舟を中心に考えなければならないということが一つあります。いつも言うように、非常に景観が悪いというのは確かにありますが、あの景観をよくするにはまたお金がかかるというのが第1にあるのではないかと痛感しております。なるべくお金をかけないで、今あるものに何か追加しながら景観の変化を考えていったらいいのではないかといいことで、今いろいろと工夫はしているところです。

それから十二橋から水生植物園の中間の行路。あそこの美化も重ねて行い、一体とした観光でないと、まちとしても難しいのではないかと思います。十二橋を入れてから植物園までの空間。植物園のお金をかけない改造。これから住民の組織を作って何とかその辺の工夫をし、我々の考える会を活かしながらやっていきたいと思っています。

今の状態ではとにかく時間をかけないと難しいと思いますが、とりあえず十二橋の命名もおかげさまで終了しました。我々の地域は6月がちょうど最盛期です。それまでには難しいと思いますので、来年度にかけて我々の組織も少し力を入れてやりたいと思っています。河合さんも最初出会った時、水郷に興味があるというお話でしたので、そういった面でこれから河合さんにも知恵を借りながら頑張っていきたいと思っています。

堀教授

また、川に話題を戻したいと思います。杉山さんは、川との関係が非常に希薄になってしまった、その関係を作り直すことを最初に考えたというお話をされました。おそらくそれは大井川だけではなく日本全体だと思います。「水の郷」は水と人とのかかわりを豊かにつくっていくという運動ですが、確かに水と人とのかかわりがなくなっていると思います。水との関係が希薄になった状態をどうやって解消していくとか、密度の濃い関係を改めてどうつくり出していったらいいのか。大井川での経験を踏まえ、水と人との関係の構築について、ほかの地域の参考になるようなアドバイス、ヒントをいただけませんかでしょうか。

杉山町長

ヒントにはならないかもしれませんが、昭和30年代までは、川狩とか、すべてのことが川を通じて行っていました。例えば、大井川を舟で上がってきた物資や食料品を子供たちが取りに行く。そういう生活をおばあちゃんから聞きましたが、今はそれがないわけです。せめて魚がいるような川にする。ウナギが遡ってくるような川にする。そこに行って魚釣りをして、自分の釣った魚のおいしいことを教えてやる。あるいは、魚をさばいて炭火で焼くおいしさを教えてやる。そうしていただければ、それが原体験となり、「俺の住んでいるところはいいのだなあ。じゃここに住んでみよう」となります。

森も同じです。いまスギとヒノキを必要で植えましたが、もっと山の恵みを教えてあげる。「山というのは四季それぞれ楽しみ方がある。いいね」。そういう体験をしながら大きくなっていただければ、これからも川根本町に住んでいこうという子供たちが生まれてくると思います。いわばそのきっかけをつくってあげなければ、やはり便利さだけの世界、テレビ、パソコンになってしまいます。あえて大人が、あるいは地域社会が、便利ということを少し取り除いて、本質的なもの、生きるために必要な知識、山の恵みというものを教えていくことが大事ではないか。これを意識的にやらないともう無理です。学校と地域と家庭が連携してやらないと育たないだろうと思い、少しずつですが、それをやっております。

それからもう1点。昔の伝統や風習には、その地域を守っていくため、あるいは人が暮らしていくために大事なものが残されています。ただ、古い伝統芸能だから価値があるということではありません。その伝統芸能は暮らしの中に生まれてきて、それがあって人々の心が集まる。あるいは、何か大事なものが含まれている。そういったことを子供たちも地域もきちんと認識することが大事だと思います。ただ昔のものを残すのではなくて、本当に大切なものがあるのだということを教えていきたいと思い、伝統芸能の継承に力を入れております。

堀教授

水と人とかかわりをもう一度教えるということで、例えば魚の食べ方、おいしさ、森の恵みというお話がありましたが、その意義です。もう1回確認させていただきたいのですが、それは一つには、子供に伝えることによって子供に地域のよさを教え、愛着を持たせたい。こういうふうに理解してよろしいですか。

杉山町長

ええ。それともう1点、生きるとはどういうことかということです。生きるというのは食べることです。それは決してスーパーから買ってくるのではなく、本来、土と太陽と水があって、そこから生まれてくる。それを人間が口にし、またそれが回っている。そういうことをいろいろな場を通じて教えていくことが必要です。ともすれば都会にいる人は、食料は買うものだという発想です。我々は、食料は自分たちが作るものではなくて、太陽の恵みだと考えます。その根本的なことをしっかり教えていくことが大事であると思っております。論点から多少ずれているかもしれませんが。

堀教授

いえいえ、全部が非常にしっかりと一致している話だと思います。私なりに整理しますと、地域は地域の資源で生きるしかない。その資源を自覚して見つけ、磨いて、ほかの人の共感も得て「ああ、いいところだなあ」と言ってもらえるようにしていかなければいけない。それは誰がやるのかというと、人がやる。人というのは誰か。当然、担い手である次の世代の子供たちです。だから、子供たちには地域のことをよく理解してもらって、おいしさ、魅力などを全部伝えていく。それをやらないと、今の運動の全体がきちんと一つの輪になっていかない、というふうに私は伺いましたので、論点は全然ずれていないと思います。

更谷村長

私もまさに同感です。私たちは「心身再生の郷」を目指しているのですが、「心身再生の郷」を定義づけると、まさに生きる力、生きる術、生きる場のある郷が心身再生になるのではないかと。生きる力、生きる術、生きる場というのはまさに、教育力、自治力、資源力になるのだろうと思います。

日本が高度成長をした時、モノとカネで大切なものがどんどん外へ出て行きました。画一的な教育が行われたのではないだろうか。今、新聞やテレビでは毎日のように、子が親を殺したとか、親が子を殺したとかいう報道がなされています。殺伐とした時代の中で、やはり田舎の大切さというものがあるのではないかと。子供たちが山へ行って本当に木を植えてみる。あるい

は水を飲んでみる。そういう体験を本当にさせてきたのだらうかと思います。

遠足というと、バスに乗ってどこかの海に行き日帰りする。そうではなく、地域の資源のところに行って汗をかいてみる、あるいは植えてみる。そういうことをカリキュラムの中に入れるわけです。そうすると、山に対する畏敬の念とか、いろいろなことを教えてくれます。そういうことを体感してもらうことによって、山の大切さ、森の大切、水の大切が醸成されていくのではないかと。そういう中で支え合ったり、人を思う気持ちがあったり、あるいは達成感があったり、満足感があったりする。人間にとって一番大切な部分がこういう体験をさせることから醸成されてくると思います。

本当に生き抜いていくすばらしい子供たちが勝負できる土台というものを、我々の社会が構築し、そういう価値観を評価する、そういう制度も作らないと駄目なのではないか。今こそその転換期にあるという思いをしております。ですから、「田舎をつぶしてどうするの？」と私は大いに言いたいと思います。

堀教授

部長が帰ってしまって本当に残念ですが、よく伝えておいてください。いま「水の郷」で起こっている運動は、大げさではなく、地域をしっかりとつくって日本を再生する運動ではないでしょうか。話が非常にまっとうでしょう。地域をもう1回見直し、そこで力を漲らせて、地域をつくる力にしていこうということです。ただ残念ながら、みな小さいわけです。現実には仕事がないからどんどん人が減ってしまって、こんな立派な町長さん、村長さんのところもあと何十年かしたらなくなってしまうかもしれない。そういうことではないですか。これをどうするのか。こういうところをしっかりともり立てて、ここの運動をきちんと情報発信していくことが日本再生であると私などは強く確信しますね。後でフロアから聴く時間があるので審議官にぜひお答えいただきたいと思うくらいですが、皆さんはいかがお思いになりましたでしょうか。

温海温泉で私が温海川のところにベンチをたくさん置いたのも、まさに人と水との関係の再構築ということです。これは、杉山さんのところの取り組みとも更谷さんのところの取り組みとも違います。違うのは当然です。それぞれの資源が違うし、お住まいの人たちもそれぞれ違う。いろいろな事情が違うからです。でも、方法論は違っても、やり方は違っても、みんな共通しているのは、人と水との関係をもう1回作り直すことです。本間さん、温海の場合は、まずは川があることを意識させるという方向であったと思いますが、やはりそれで人の川に対する意識が変わっていますでしょうか。大事なところはそこです。整備しても、それによって人と水との関係が改めて作り直されないといけないわけですが、何か動きはありますか。例えば川を使ってどうしようとか、そういうところまでいっていますか。

本間

今まで護岸が危なくて下りて行けなかったのが下りられるようになって、先ほど報告したとおり、アユの放流を子供が行いました。放流は6月ですから、例えば水が冷たい季節であることが分かる。そういうこともあります。また、対岸とこちら岸から川を見つめることができずので、真ん中に台を置いてコンサートはできないか。桜の満開のシーズンに十二単の着付けができないか。そういうアイデアは住民からたくさん出されるようになりました。

堀教授

写真にありましたが、上から川まで3メートル50センチぐらいあります。そこを下りられるようにしました。デザイン上のテクニックがいろいろあって、危なくなく下りられます。人と水との関係を作り直したわけです。今のは、面白い話でした。地元の人たちもいつも見ていただけでした。それが簡単に触れられるようになると、改めて「うちの川って冷たい」と感じることができる。今、水と人との関係はそんなことすらも知らなくなっているわけです。ものすごく希薄になってしまった。これをもう1回改めて作り直すということです。

小倉さんの与田浦のところも写真を見てお分かりだと思いますが、非常に希薄になってしまいました。出隅、入隅といって、大変豊かな曲線で引っ込んだり、出たりしていたのが真っ直ぐの護岸にされてしまった。でもあの護岸は、石で造られていて、非常に高いものです。お金はべらぼうにかかっているのだが、人と水との関係は切れてしまっている。こういうものをもう1回丁寧に見直して、人と水との関係を作り直すことが大事なのだと思います。

先ほどお話を伺っていて私が強く思ったのは、やはり何でも丁寧にやらないと駄目だということです。雑にやっているといい関係は築けません。そこに気付いてくれるかどうかです。小倉さん、ありますか。

小倉

水をきれいにすることがまず最優先かと思います。以前は水を飲んでいたのですが、環境状況が非常に悪くなっている。農業の改善もしなければならぬ。垂れ流しの水がかなり入っているのではないかということです。その原点をつぶしてから水をきれいにしなければなりません。潮来だけではなくよそもそうではないかと思います。そして先ほど言われましたように、泳いでいる魚が食べられるようにする。公害のない魚と水。人間、植物はまず水と言います。原点はそこにあるのではないかと思います。舟で通っても水がきれいであると「ああ、きれいだなあ」と思いますが、汚いところを舟で走ると非常に印象が悪い。そういうことは痛切に考えています。ですから、水をきれいにするにはどうしたらいいか、というのも一つの課題であると思っています。

杉山町長

水をきれいにするというのですが、多くの方は、水は供給されるものという発想でいます。自分たちが自然と共に水をつくっていくという発想になれば、当然その浄化というのは自分の身近なものになります。水道栓をひねればきれいな水がくるといって、それこそ上流のことを知らない人たちが多いためには汚れていくのではないかと。その辺の発想から変えていかないと、本当の水の循環はできていかないだろうと思っています。

堀教授

汚くなったのではなく、汚くした。簡単なことだと思います。そこに気付いたら、あとはやるかやらないかだと思います。

杉山町長

先ほど堀先生から、川根本町は10年後、20年後はなくなるかもしれないというお言葉があ

りましたが、我々はそういう心配はしていません。人間は森で生まれ、森からだんだん都会に
来たわけですから、基本的には何万年でも生きていられるわけです。日本で言えば、いわゆる
今風の都市は何百年の歴史しかありませんが、これからずっと生きていけるのか。コンクリー
トは、本当に千年もつのか。木造住宅は間違いなく千年もつという実例があります。そういう
意味では我々は安心感というものがあります。都会はすべてよそからモノを買っている。供
給・消費型の生活をしています。だから安心感がないのでストレスがたまる。でも、山村には
自給型の生活ができる仕組み・資源がありますから、「いやー、どうなっても何とか生きてい
けるよ」という安心感があります。そういうところは絶対 100 年、200 年は生き延びる。ただ、
仕組み的には町長としてやらなければならないことはありますが、精神的には今そういう自信
を持ってやっているから、必ず生き残るし、生き残るべきだと思っています。

堀教授

全くそうですね。私が言ったのは「なくしていいのですか」という問いかけで、なくなると
は思っていないし、なくしていいとは絶対に思っていません。

更谷村長

当村も生き延びようと思ってやっておりますが、その時に、やったことが住民にとってみる
と、「おい、これで明日の飯が食えるのか」という現実問題があります。これと村の目指す方
向とのバランスがとれていないと、村は持ちません。近々は山の手入れなどで雇用の場を確保
し、片方では、夢を語り、あるいは自分たちの伝統・文化のアイデンティティを創っていく。
あまり明日の働く場所を創ると、10 個出せば 15 個よこせ、20 個よこせとなります。それと
夢を語り目標を達成するところとのバランスをどうとっていくのかということになります。そ
の辺が先ほど言った意識改革とか、危機感を持った個人それぞれの村を愛する心とか、そうい
うものにつながっていくのではないか。しかし、これが難しい。

堀教授

でも、結局そのところが地域力なのでしょうね。ないものねだりをずっとするようなど
ころに未来はないし、かといって現実を知らないで夢ばかり言うのもまずい。その辺のところ
ですね。

更谷村長

だから、交流人口も必要です。知恵も技術も村の中に来てもらって、いろいろな人の話を聞
く。聞く耳を持つ。そして、どうするかということをおもひで考えていくことも必要ではない
かと思っています。

堀教授

話は尽きません。いろいろまだお聞きしたいのですが、フロアからもご意見を聞きたいので、
ひとまずここでパネルディスカッションを閉じたいと思います。もうまとめません。要点は頭
に入ったと思います。最初にまとめたとおりです。

パネリストの皆さん、今日はどうもありがとうございました。これで終わりたいと思います。

質疑応答

香取市民

香取市から来ました。小倉さんが発表した十二橋の地区に住んでいます。本間さんの報告ではいろいろ事業をやられているようですが、行政が主体になったのか。地域の住民の盛り上げはどれだけあったのか。まずスタートはどちらであったのかお聞きしたいと思います。

本間

やはり行政だと思います。実際に危機感を持っていたのは住民でした。でも、勉強をして一緒に仕事はするのですが、行政がリードしていかなければいけないところがあると思います。

香取市民

私もこの地区の会長をやらせていただいてそういうことは痛感しました。誰かがリーダーシップを執らないと、やはり地域の人あまり動かないというのが現実だと思います。

本間

ただ、現状をお話ししますと、私も実は役場の職員なので非常にやりにくい面があります。「観光新聞」は、ボランティアで個人的に引き受けていました。ですから、行政の職員という顔と、「一住民です。私も人材です。一緒にボランティアをやっています」という顔と二つの顔があります。我々の町は1万人の人口です。私はそれをよしとして3年やったのですが、それをやっているうちに住民が「新聞と一緒にやってみたい」と思ってくれたようです。官民一体になるということ考えた時に、卵が先かニワトリが先かではないのですが、意識の中ではやはり仲間なのだと思います。分かってもらえるかどうか分かりませんが、行政ということに縛られてしまうと、思いがあっても仕事をやり抜くことはできません。そういう時が非常にあります。私はそういうのは結構「もったいない」という気持ちがあるので、少し自分に痛い矢が刺さったとしても、「まあ、少し我慢して頑張るぞ。いつかは分かってもらえるのではないか」と考えます。

役場職員の仕事の一番の冥利は役場のデスクだけにあるのではない。そういうことをものすごく思っています。先生がおっしゃったとおりで、やはり最後は人間なのだと思います。先ほど先生は、おいしいアメをくれると言いましたが、役場でどんなに辛い思いをしても先生が私の仕事ぶりを大きな声でほめてくれるので、「また頑張るぞ!」という気持ちになれるということはあります。失敗すればものすごく怒られるのですが、役場の人間には正しく仕事をほめられたり評価されたりということはありません。そういう意味で、本当のプロのアドバイスは非常に必要なことではないかと思っています。

香取市民

先ほど、温海温泉にぜひ来てくださいと言われた時に手を挙げなかったのですが、ぜひ行かせていただきます。

本間

ありがとうございます。

杉山町長

うちの町にも優秀な職員がたくさんいますが、本間さんの発表を聴いていて、こういう職員がいればいいなあと思いました。今のお答えに若干答えはあったのかもしれませんが、「こういうことがあるから私は一生懸命やっています」、「こういう職場だからできています」という、本間さんをもう一人うちの町につくるためにはどんなことが必要なのか、アドバイスをいただきたいと思います。

本間

私でしょうか。

杉山町長

ええ。本間さんがいま一生懸命やれるのは何なのかということをお聞きして、私も役場に帰ってそういう環境をつくれればと思っています。

本間

本当のことを言うと、私は役場に入りたくなかった。実は東京にいまして、バイトを誘ってくれた人から、「カフェの仕事をしないか。お店を任せる」というおいしい話がありました。そうしたら父が、「そんな危ないことをしないで、田舎に帰ってきて役場の職員になってくれ」と言って、荷物を全部持って行ってしまったのです。それで役場職員を見た時にまず、「何て魅力がないのだろう」と思いました。がっかりしてしまったわけです。私も見た目は非常に派手ですが、「やはり人間的にああなりたい」とあこがれて、その仕事に就くと思うのです。私はベビーブーム時代の子供なので選ぶ仕事はいろいろあって、田舎には帰りましたが、格好いい仕事をしたいとか、地味な役場職員はいやだとか、気持ちはグラグラ揺れました。それをがっちり見抜いて押さえたのが父親です。父親があんなにお願いしているのを見たのは私も初めてだったので、「まず、役場に入ってみる」と言いました。そうしたら父は、「真弓や、役場さ入ったらのう、給料泥棒さだけはなんねえでくれ」。そう言ってくれました。

そのほかにもう一つ、父が言ってくれたことがあります。「真弓が役場で仕事をやっついぐ時に、あの子の言うことだば何とかしてやんねえばねえぞって周りになるように頑張れ。それはのう、役場の中でもそうだし、市民の中さ入って行ってもそうだよ」。父親とはよくけんかをしますが、私がこの十何年間か役場を辞めないで支えられたのは、まさしくこの父親の言葉なのです。

子供が反発してくるから言わないとか、けんかになって面倒くさいから言わないとか、そういうことではなくて、人間的にどうしてもこれは言わなければならないということは、なんぼ恨まれてもけんかになっても言うべきだと思います。そうではないですか。

堀教授

それは親子だけではなく、地域の人との間もそうだし、役場の職員同士もそうだし、全部そ

うですよ。

杉山町長

いい役場の職員をつくる特效薬はない。親子関係からつくらなければいけないということがよく分かりました。ありがとうございます。

本間

少し足しますと、私は役場にいてもこんな調子なものだから、上司からすごく嫌がられることもあります。でも役場の人間も家族というか、愛が生まれてきて結構仲良くやっているのですが、おとなしい上司方も全然気にしないで私を怒ります。この人が怒るのかというような人まで怒ります。それはオープンマインドだからです。殻に閉じこもらないで自分を開く。まず入って来いって。すきを見せるといふか、やはりそういうことがすごく大事だと思います。自分がコートを着ていたら誰も近寄ってくれません。「おめえ、暑いんじゃないか？」とも言ってくれない。そういうことがいろいろあると思います。

堀教授

今日は独演会ですね。真弓さんは発表の時はものすごく緊張していました。普段は饒舌な人なのに非常にゆっくりだったでしょう。どうしたのかなと思っていたのですが、やっと調子を取り戻したようです。

先ほど聴いたように、今日は非常に大事な話がありました。私たちが知らない大事な話が「水の郷」にはあって、情報発信をしたいことがいろいろあると思います。もう予算を組んでしまったから 20 年度以降になるのでしょうか、審議官にはぜひまた、いろいろ工夫をしていただくよう、何とかよろしくお願ひしたいと思います。

司会

以上をもちまして、「第 12 回全国水の郷サミット」を終了させていただきます。本サミットを契機といたしまして、全国の「水の郷」の認定市町村において新たな地域づくりが始まることを祈念いたします。皆さま本当にありがとうございました。